

令和元年度 看護学教育ワークショップ報告書

多様なCQIをささえる 大学間相互支援ネットワークの力

Continuous
Quality
Improvement



主催 文部科学大臣認定看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

日時 令和元年10月28日(月)~29日(火)

場所 千葉大学けやき会館(千葉市稲毛区弥生町1-33)

目 次

1. 千葉大学挨拶	1
千葉大学大学院看護学研究科長 中村 伸枝	
2. 開催趣旨	2
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長 和住 淑子	
3. 令和元年度看護学教育ワークショップ 実施要領	3
4. 令和元年度看護学教育ワークショップ 日程表	5
5. 参加者概要	6
《講演と報告の部》	
6. 【報告】「CQI モデル開発とその成果」	8
報告者 和住 淑子 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長	
7. 【講演】「大学教育における内部質保証の動向」	18
講師 工藤 潤 公益財団法人大学基準協会 事務局長	
8. 【報告】「CQI 実践事例」	47
報告者 深田 美香 鳥取大学医学部保健学科 教授	
《グループワークの部》	
9. 全日程参加者グループ別名簿	66
10. 看護学教育 CQI モデル Ver. 1 を用いたワークの進め方・モデル図	68
11. ワークシート (A~D)	71
12. 公開座談会	75
13. 全体討議・まとめ	82
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長 和住 淑子	
《総括》	
14. ワークショップ評価	85
15. おわりに	98
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 准教授 黒田 久美子	
16. 実施体制	99

1. 千葉大学挨拶

千葉大学大学院看護学研究科長

中村 伸枝

おはようございます。千葉大学大学院看護学研究科長の中村です。

本日は、ご多用のところ、本研究科附属看護実践研究指導センター主催の看護学教育ワークショップにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。本年度も全国から多くの皆様にご参集いただき、本日、開催できますことを大変うれしく思っております。

本センターは、我が国の看護学教育分野で唯一の文部科学大臣認定教育関係共同利用拠点として、看護系大学各々では解決しがたい課題の解決や取り組みの共有により、効果的・効率的な教育改善を推進することを使命として活動しています。

中でも、2016年からは、文部科学省の支援をいただきながら「看護学教育の継続的質改善（CQI：Continuous Quality Improvement）モデルの開発と活用推進」事業に取り組んでおり、今年度はその事業の最終年度にあたります。このワークショップもCQI事業の一環として位置づけ、日本看護系大学協議会とも協力しながら実施するものです。

昨年度のワークショップでは、「自大学の見方を変える、CQIへのエネルギーを得る」をテーマに、当センターで開発中の「CQIモデル」を使ったワークを行いました。その結果、モデル図からの気づきとともに、グループワークでの他大学との比較、相互の学びの影響が大きく、参加者の方がエネルギーを得ていることがわかりました。

そこで、本年度のワークショップでは、このような参加者相互の学びをより一層推進したいと考え、プログラムを企画しました。多様な立場のCQIの実践者から学び、必要な能力を把握するとともに、大学間相互支援を通して、各大学における多様なCQIのありようを考える場となるように、テーマを「**多様なCQIをささえる大学間相互支援ネットワークの力**」としました。参加者が自大学で看護学教育の継続的質改善（CQI）を推進することに向けて、CQIの実践者から学び、必要な能力を把握するとともに、大学間相互支援を通して各大学における多様なCQIのありようを考えること、今後の大学間相互支援のネットワークを広げる機会にしたいと思います。

最後になりますが、ご参集いただきました皆様の総力によりまして、実りある成果を出していただけるよう期待しております。2日間どうぞよろしく申し上げます。

2. 令和元年度看護学教育ワークショップ開催趣旨

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長
和住 淑子

看護学教育の分野では、専修学校や短期大学から大学教育への移行が急速に進展し、毎年約 10 校のペースで大学の新設が続き、令和元年 4 月現在、看護系大学は、272 大学 285 課程となっている。このように、常に教員の需要が供給を上回る状況となっており、看護系大学教員の量的、質的確保は、大きな課題となっている。

加えて、地域包括ケアシステムの構築が進む中、病床の機能分化も進み、看護の対象者の多くは、病院の病棟ではなく、外来、地域のケア施設などの非医療機関、自宅に存在するようになった。このような社会の変化に即して、看護職の新たな役割発揮が求められている。

また、看護系大学の学生が多く実習する急性期病院の病棟では、病床機能分化に伴い、以前と比較すると患者の平均在院日数が非常に短くなってきており、医療ニーズの高い状態で退院し、患者全体の重症度も上がっている。こうした実習環境は、看護の初学者である学生にとって、必ずしも効果的な学習環境とはいえない。さらに、複合疾患を有する高齢入院患者が各病棟で増加しており、以前のように、成人期の患者の特徴を修得するために効果的とはいえないなど、実習環境も激変している。

このような背景の中、当センターは、文部科学大臣認定看護学教育研究共同利用拠点事業として「看護学教育の継続的質改善（CQI）モデルの開発と活用推進」に取り組んでいる。この事業の目的は、国がめざす「効果的・効率的な医療提供体制の構築」の課題を解決し、地域で人々の Life（生命・生活・人生）を支える自律的看護職を輩出するために、看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement：CQI）モデルを開発し、活用を推進することにより、全国の看護系大学の自律的・持続的機能強化を支援することである。本事業は、平成 28 年度より 4 年間の計画で進めており、本年度（令和元年度）は、その最終年度に当たる。本看護学教育ワークショップは、この事業の一環として開催するものである。

昨年度の看護学教育ワークショップは、「自大学の見方を変える、CQI へのエネルギーを得る」というテーマで、本事業で開発した「看護学教育における CQI モデル Ver. 1」を使ったグループワークを実施した。その結果、このモデル図からの気づきをきっかけとして、他大学との相互比較が活性化し、結果として大学間相互の学び合いが促進され、CQI へのエネルギーを得ることができた。この成果を踏まえ、今年度の看護学教育ワークショップは、「多様な CQI をささえる大学間相互支援ネットワークの力」というテーマで企画した。参加者には、自大学で看護学教育の CQI を推進することに向けて、CQI 推進の実践者から学び、必要な能力を把握するとともに、大学間相互支援を通して、各大学における多様な CQI のあり様を考え、今後の大学間相互支援のネットワークを広げていただければ幸いである。

3. 令和元年度看護学教育ワークショップ 実施要項

1. テーマ 多様なCQIをささえる大学間相互支援ネットワークの力

2. 主旨

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターは、看護学教育共同利用拠点として、多くの看護系大学との協働のもと、看護学教育の継続的質改善（CQI）のモデル開発に取り組んでいる。昨年度のワークショップでは、自大学の見方を変える、CQIへのエネルギーを得ることを目的に、開発中のCQIモデルを使ったワークを行った。その結果、モデル図からの気づきとともに、グループワークでの他大学との比較、相互の学びの影響が大きく、参加者の方がエネルギーを得ていることがわかった。

そこで、本年度のワークショップでは、多様な立場のCQIの実践者から学び、必要な能力を把握するとともに、大学間相互支援を通して、各大学における多様なCQIのありようを考える場としたい。

3. 目的

参加者が自大学で看護学教育の継続的質改善（CQI）を推進することに向けて、CQIの実践者から学び、必要な能力を把握するとともに、大学間相互支援を通して各大学における多様なCQIのありようを考えること、今後の大学間相互支援のネットワークを広げることを目的とする。

4. プログラム概要（詳細は別紙）

報告「CQIモデル開発とその成果」、
「CQI実践事例」、
講演「大学教育における内部質保証の動向」、
公開座談会、グループワーク、全体ディスカッション

5. 主催

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

6. 実施方法

(1) 期間 令和元年10月28日（月）～10月29日（火）2日間

(2) 会場 千葉大学けやき会館（千葉市稲毛区弥生町1-33）
（西千葉キャンパスで、看護学部がある亥鼻キャンパスとは異なります）

(3) 日程 別紙のとおり

(4) 定員 【講演と報告の部】 100名
【全日程】 60名

(5) 参加要件 【講演と報告の部】 どなたでも参加できます。
【全日程】

看護系大学において、組織的な教育の質改善(CQI)を推進する教員
原則として、准教授以上とし、以下の①～②を充たすことといたします。
①全日程に参加できる。

(参加者全体への影響がありますので、途中参加・退席は認められません)
②自大学に関する情報を収集し、資料を当日に持参できる。

(6) 参加申込 【講演と報告の部】

本センターホームページ(<https://www.n.chiba-u.jp/center/>)にある看護学教育ワークショップ申し込みフォームより、お申し込みください。

*申込み〆切：9月30日（月）17時

【全日程】

看護師等養成課程を置く学部等の長の推薦が必要です。本センターホームページ (<https://www.n.chiba-u.jp/center/>) より所定の「参加申込書」をダウンロードし、看護学教育ワークショップ申し込みフォームにPDF添付の上、お申し込みください。

*申し込み〆切：**8月26日(月) 17時**

(7) 参加者決定

【講演と報告の部】

お申し込み確認後、必要事項(振込先等)をメールにてご連絡いたします。

【全日程】

9月6日(金)までに、参加の可否をメールにて通知します。定員を超える応募者があった場合は、参加申込書等を参考にして決定させていただきます。

※準備の都合上、当日参加は認められませんので、参加の可否を、事前にご確認願います。

(8) 参加費 【講演と報告の部】 5,000円

【全日程】 20,000円

※ 本ワークショップ参加のために要する経費(往復旅費、宿泊費、昼食代)は、派遣施設および参加者でご負担ください。

※ 参加決定の連絡の際に、振り込み先をご案内します。

(9) 昼食 全日程参加の方は、当日は混雑が予想されますので、各自お弁当をご持参願います。

(10) 交流会 全日程参加の方は、初日の日程終了後に千葉大学けやき会館内レストランで交流会を開催いたします。

※ 予約手配の関係上、参加申込書に出欠をご記入ください。

(11) 宿泊施設 各自で手配をお願いいたします。

(12) 修了証書 2日間の全日程に参加した方を、修了要件を満たしたと評価し、千葉大学大学院看護学研究科より修了証書を授与いたします。

7. 個人情報の取り扱い

看護学教育ワークショップへの申込みに際し提出された「参加申込書」等に記載の個人情報については、看護学教育ワークショップ業務及びセンター年報への名簿掲載のために利用し、それ以外の目的に利用することはありません。

8. お問い合わせ先

〒260-8672 千葉市中央区亥鼻 1-8-1

千葉大学看護学部センター研修担当

TEL : 043-226-2464

FAX : 043-226-2382

メール : kango-CQI@chiba-u.jp

4. 令和元年度看護学教育ワークショップ日程表 多様な CQI をささえる大学間相互支援ネットワークの力

《第1日目 10月28日(月)》

9:30～ 受付(千葉大学けやき会館)
10:00～10:10 開会の辞
来賓挨拶 文部科学省 高久奈津子 専門職

【講演と報告の部】

10:10～10:40 報告「CQI モデル開発とその成果」
当センター センター長 和住淑子
10:40～11:40 講演「大学教育における内部質保証の動向」
大学基準協会 事務局長 工藤潤 氏
11:40～11:50 休憩
11:50～12:30 報告「CQI 実践事例」
鳥取大学 医学部保健学科 教授 深田美香 氏

《講演と報告の部のみの参加者》 解散

【全日程】

12:30～13:30 昼食・休憩
13:30～17:00 オリエンテーション・ワーク1(グループワーク)
17:00～19:30 交流会

《第2日目 10月29日(火)》

9:30～12:00 公開座談会
12:00～13:00 昼食・休憩
13:00～14:30 ワーク2(グループワーク)
14:50～15:40 全体討議まとめ
15:40～16:00 閉講式

事前課題：ワークシートのA,Bを記載してもらい、参加

ワーク1：自大学の現状分析ワーク 5～6人×8G(職位や地域はバラバラで編成する)
・ワークB,Cを実施

公開座談会：CQI実践者4名からの話題提供とディスカッション

ワーク2：ワーク1のグループに戻り、シートDの個人ワーク、メンバーへの計画宣言とコメントのフィードバック

全体討議・まとめ：全日参加者のCQIの課題を俯瞰して、全国の看護系大学で必要なCQIの様相と期待される成果(地域で人々のLife(生命・生活・人生)を支える看護職を輩出する)に向けた課題等を検討する。

5. 参加者概要

■全参加者（講演と報告の部のみ参加者含む） 60大学 77名

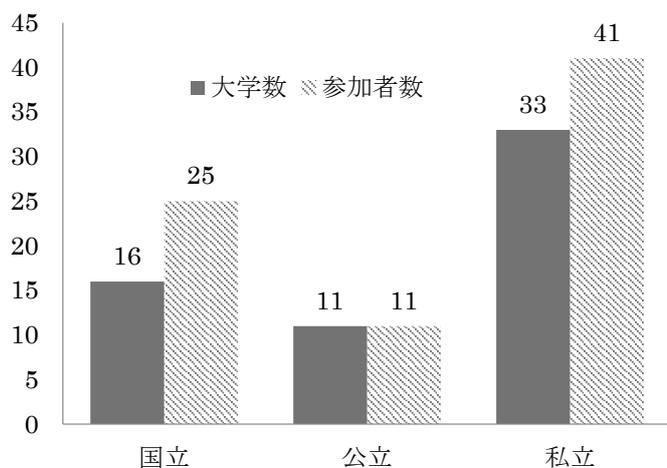


図1 国公立別参加大学数・参加者数

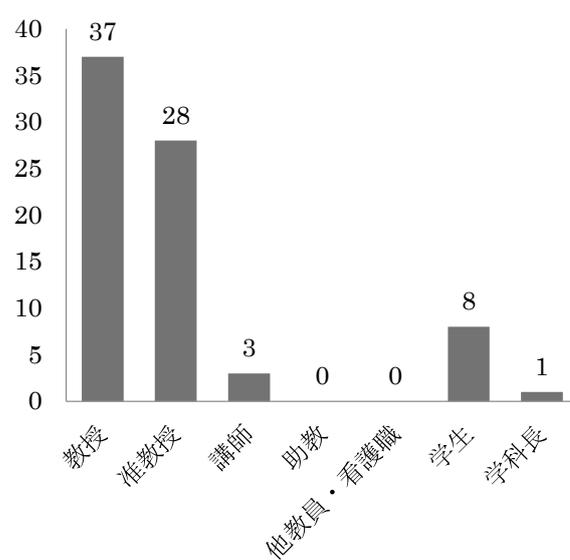


図2 職位別参加者数

■全日程参加者 44大学 46名

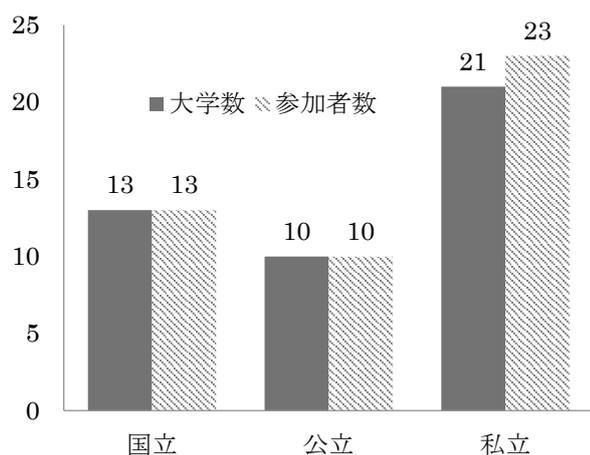


図3 国公立別参加大学数・参加者数

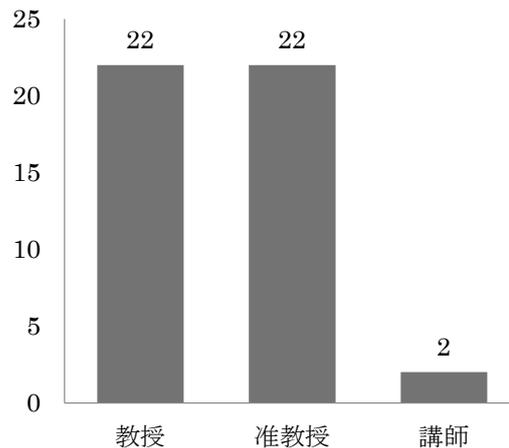


図4 職位別参加者数

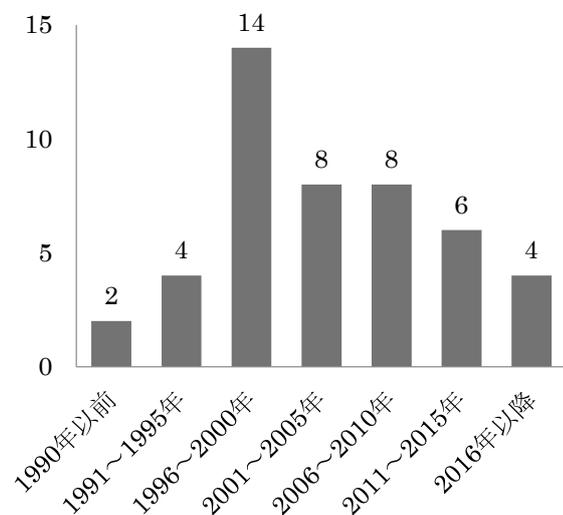


図5 開設年度別参加者数

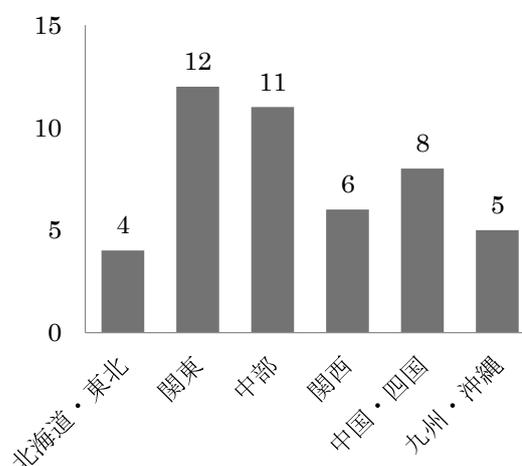


図6 全国ブロック別参加者数

多様なCQIをささえる大学間相互支援ネットワークの力

<講演と報告の部>

報告「CQIモデル開発とその成果」

報告者：和住淑子

(千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター センター長)

講演「大学教育における内部質保証の動向」

講師：工藤 潤

(公益財団法人大学基準協会 事務局長)

報告「CQI実践事例」

報告者：深田 美香

(鳥取大学医学部保健学科 教授)

看護学教育研究共同利用拠点
令和元年度看護学教育ワークショップ

6. 報告「CQI モデル開発とその成果」

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長
和住 淑子

当センターは、文部科学大臣認定看護学教育研究共同利用拠点事業として「看護学教育の継続的質改善（CQI）モデルの開発と活用推進」に取り組んでいる。この事業の目的は、国がめざす「効果的・効率的な医療提供体制の構築」の課題を解決し、地域で人々の Life（生命・生活・人生）を支える自律的看護職を輩出するために、**看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement : CQI）モデル**を開発し、活用を推進することにより、全国の看護系大学の自律的・持続的機能強化を支援することである。

当センターがこの事業に取り組む背景には、①地域包括ケアシステム構築を始めとする社会の変化に即した看護職の新たな役割発揮が求められていること、②看護系大学の急増による教員の質的量的確保と実習施設の確保が課題となってきたこと、③270校を超えるまでになった各看護系大学が、それぞれの特徴を活かし、学生の多様性に対応して自律的な看護職を育成する必要があること、の3点がある。

本事業は、平成28年度より4年間の計画で進めており、本年度（令和元年度）は、その最終年度に当たる。当センターでは、平成28年度から29年度にかけて、看護系大学教育のCQI実態に関する全国調査や事例研究を行い、その結果を活用しながらモデル開発を行ってきた。開発した**CQI モデル Ver. 1**は、**図1「看護系大学教員としての自己の立ち位置を見極めるための構造図」**、**図2「看護学教育の継続的質改善に向かう思考の方向性をあらかず図」**の2つのモデル図から構成されている。図1は、看護系大学のCQIを考えるにあたり、視野に入れるべき要素と要素間の関係性、関係性の広がり範囲を示しており、個々の看護系大学教員が自己の立ち位置を多面的に見極めることができるようになることを期待して作成した。図2は、現状に至るプロセスの振り返りを促すことによって、より深い現状認識に至り、それを踏まえて自大学のありたい姿や必要なCQIについて、それぞれの看護系大学教員が自身の立場から検討できるようになることを期待して作成した。

昨年度の看護学教育ワークショップは、「自大学の見方を変える、CQIへのエネルギーを得る」というテーマで、**CQI モデル Ver. 1**を使ったグループワークを実施した。その結果、このモデル図からの気づきをきっかけとして、他大学との相互比較が活性化し、結果として大学間相互の学び合いが促進され、CQIへのエネルギーを得ることができた。

この成果を受け、当センターでは、今年度新たに①**CQI モデル Ver. 1**の活用効果を検証する、②CQIを推進するために必要な戦略活動を説明するモデル図（以下、実行モデル）を新たに開発する、③CQI推進者に必要な能力を明らかにする、という事業を開始した。本日の報告では、その成果の一部を紹介する。

研究は、「看護学教育のCQIに関する事例研究—モデル Ver. 2 開発に向けて—」というテ

ーマで、昨年度の看護学教育ワークショップ参加者のうち、フォローアップ調査において、当センターのサポートを希望し、連絡をとってもよいと回答した大学に、改めて研究協力を依頼し実施した。10 大学の協力を得て、ワークショップ参加後、どのような CQI が展開されたのかを調査した。

調査対象大学において実施された CQI のテーマは、「積み重ね型学習である看護学教育における教員間協働連携－負担感改善への見える化－」「自大学地域に必要な看護職育成に向けたボトムアップ型 CQI 」など多様であった。各看護系大学では、問題に気づいた CQI 推進者が、**CQI モデル Ver. 1** を活用することで、自大学・自己を客観視できるようになり、他大学との相互比較を繰り返す中で、自大学の価値や強みを認識したり、再認識し、逆に弱みを反転できることを見いだしたりしていた。その後、推進者として何らかのアクションを起こす中で、組織が変化し始め、その組織の反応を通して次第に CQI 推進の目標像が明確になってきていた。その活動の中で、自大学への自負が高まり、学生や看護の対象者への応答を通して相互信頼が生まれ、継続的に質改善していく組織へと変化していた。そこで、このような変化のモデル化し、「**看護学教育 CQI モデルの実行モデル図 (案)**」を作成した。

さらに、個別事例研究の結果から、看護学教育の CQI 推進者に必要な能力要素とその関係性を導き出した。まず、CQI 推進の原動力は、①**学生の学びのための改善への意志**であり、CQI 推進に必要な知識は、②**教育課程編成・実施に関わる知識や現状分析方法**であった。これらが相俟って、CQI 推進者としての覚悟が定まり、③**問題があっても腹をくくり、やるべきことに向かって前進する**ことができていた。さらなる前進を続けるためには、チームに働きかけるスキルとして、④**円滑な目標達成に向けたチームづくり、調整、共有の力**が必要であった。このチームづくりが促進されるためには、組織を構成する各教員に、⑤**CQI の必要性の認識、適切な相談、実践**が必要であり、その一方で、組織として、⑥**組織ルール内での裁量と組織支援**が必要であった。このようにして円滑な目標達成に向けたチームづくりが進むと、ますます CQI 推進の原動力である学生の学びのための改善への意志が高まり、CQI 推進に必要な知識が増える、という良循環が起こっていた。「**看護学教育 CQI モデルの実行モデル図 (案)**」は、このようにして、看護学教育の継続的質改善が実現されることを示している。

この成果を踏まえ、今年度の看護学教育ワークショップは「多様な CQI をささえる大学間相互支援ネットワークの力」というテーマで企画した。全日程参加者には、自大学で看護学教育の CQI を推進することに向けて、CQI 推進の実践者から学び、必要な能力を把握するとともに、大学間相互支援を通して、各大学における多様な CQI のあり様を考え、今後の大学間相互支援のネットワークを広げていただきたい。

【報告】 CQIモデル開発とその成果



センター長 和住 淑子



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

看護学教育の 継続的質改善 (Continuous Quality Improvement : CQI) モデルの開発と活用推進

【事業目的】

国がめざす「効果的・効率的な医療提供体制の構築」の課題を解決し、地域で人々のLife(生命・生活・人生)を支える看護職を輩出するために、**看護学教育の継続的質改善 (Continuous Quality Improvement : CQI)**モデルを開発し、活用を推進することにより、全国の看護系大学の自律的・持続的機能強化を支援する



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

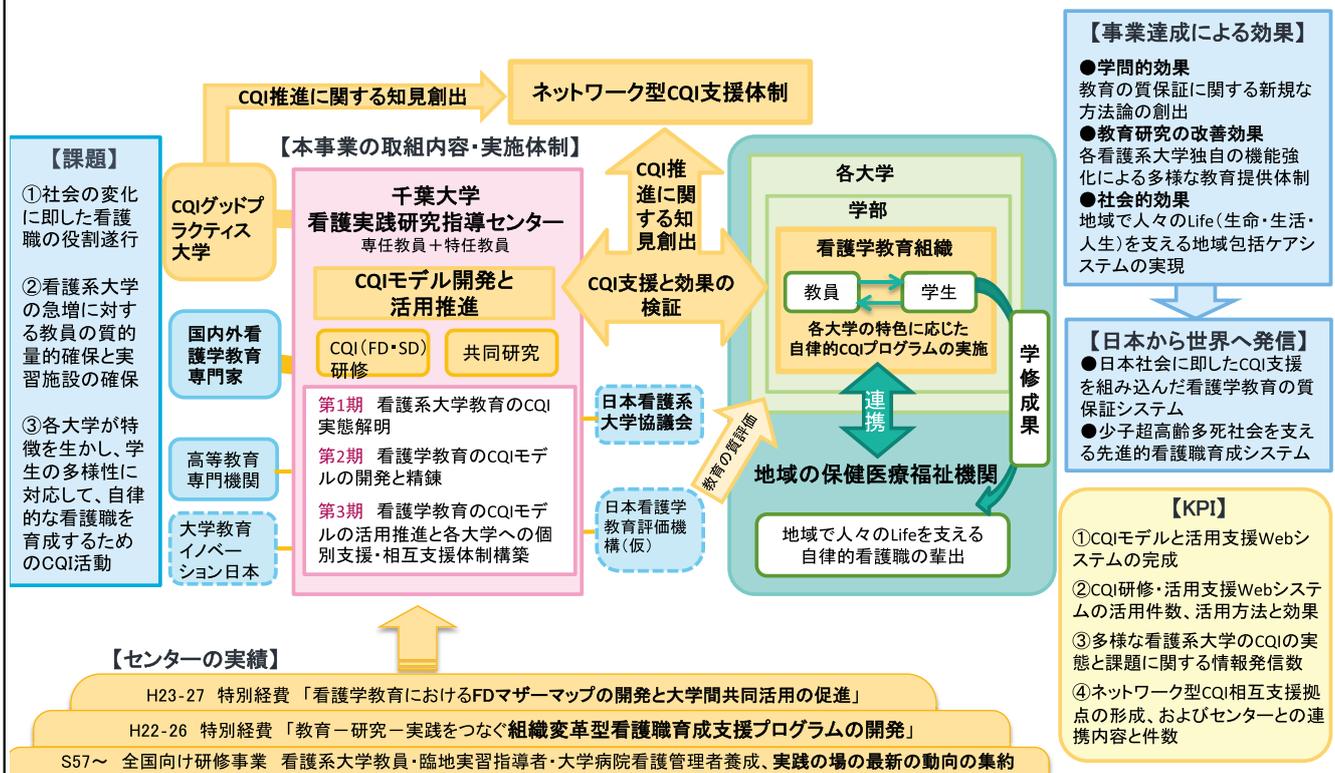
看護学教育の 継続的質改善 (Continuous Quality Improvement: CQI) モデルの開発と活用推進

【事業の背景】

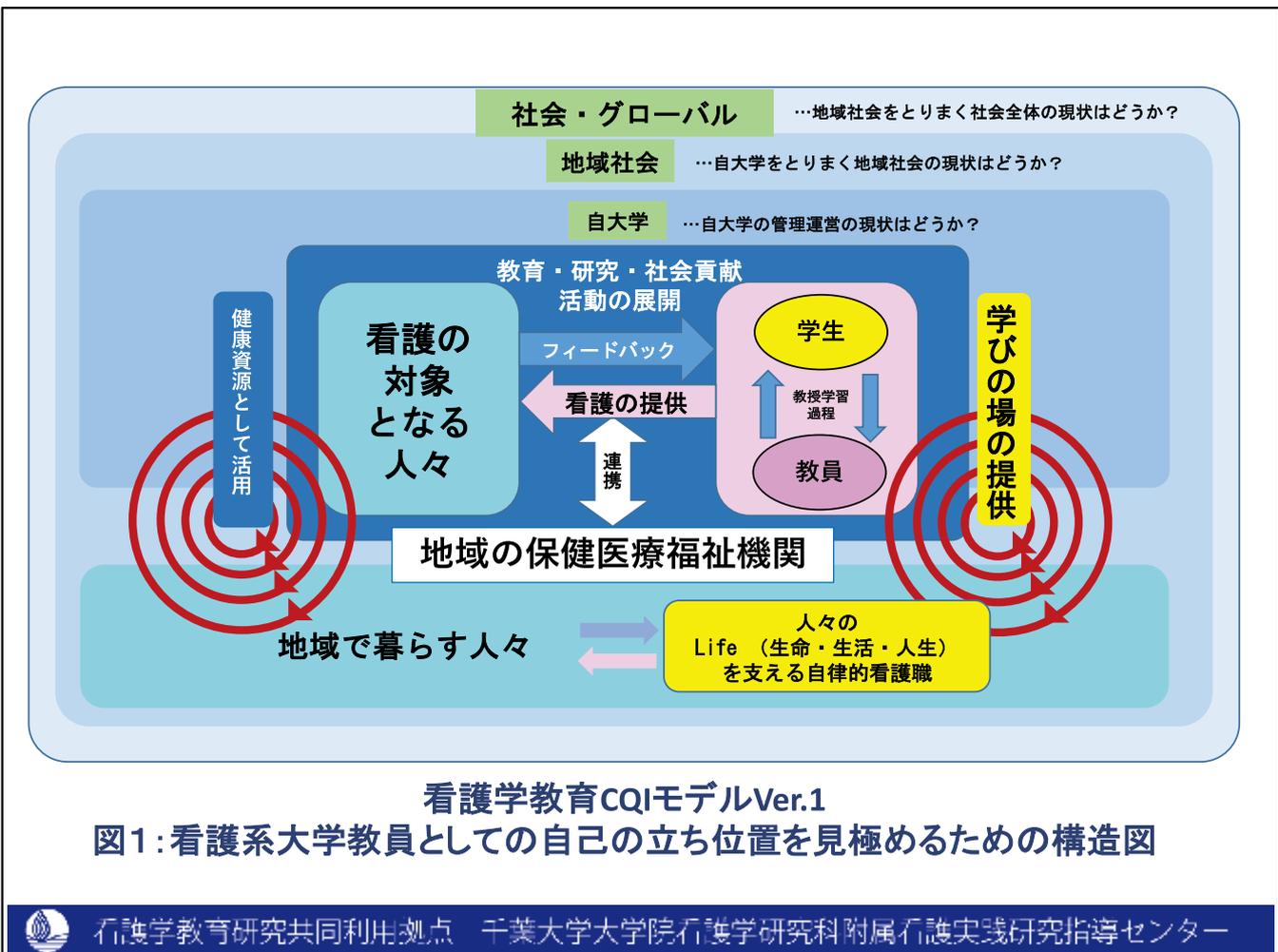
- ① 社会の変化に即した新たな看護職の役割発揮が求められている
- ② 看護系大学の急増による教員の質的量的確保と実習施設の確保が課題
- ③ 270校を超えるまでになった各看護系大学が特徴を生かし、学生の多様性に対応して、自律的な看護職を育成する必要性



看護学教育の継続的質改善(CQI)モデルの開発と活用推進



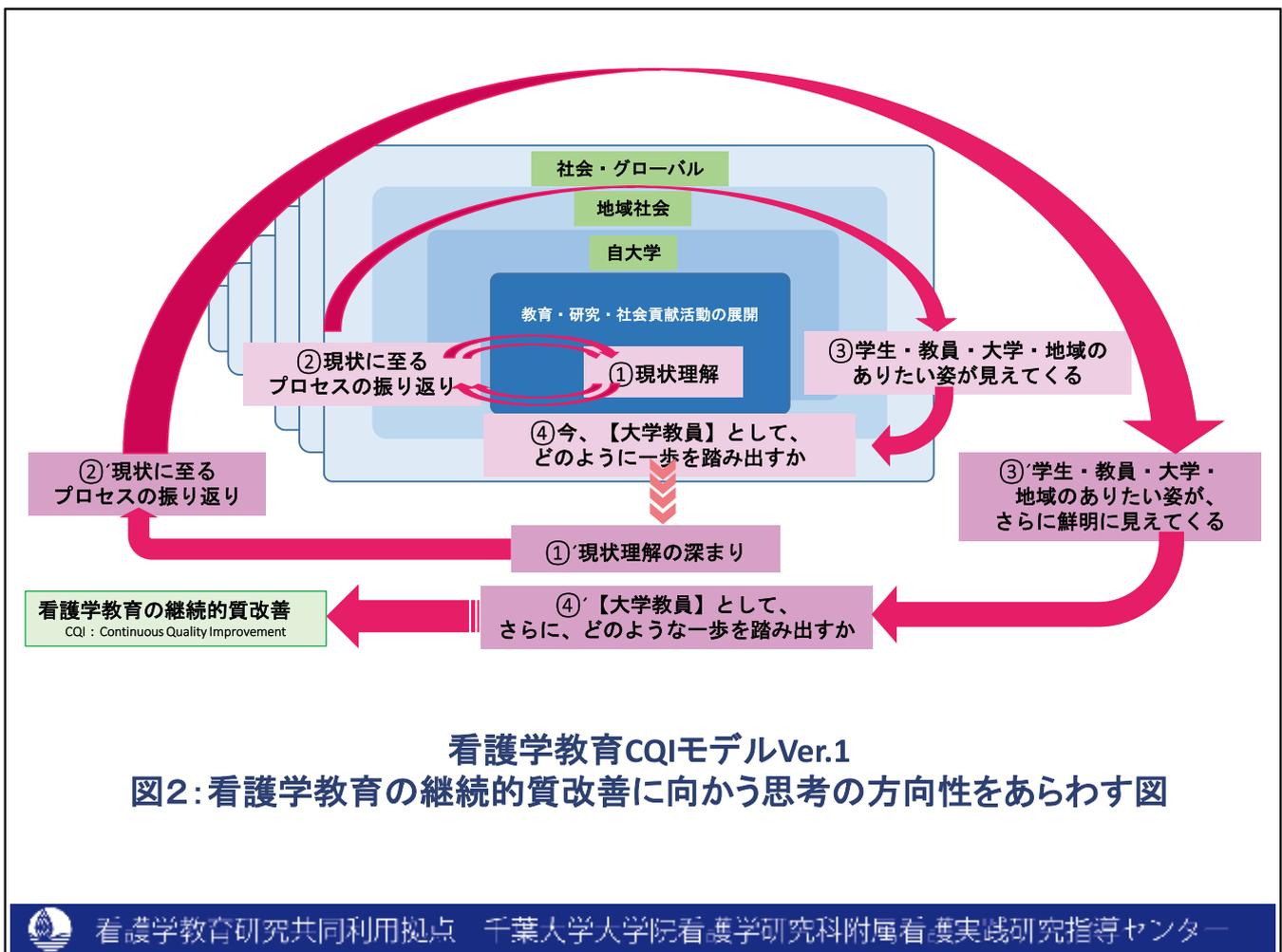
	平成28年度	平成29年度(実施中)	平成30年度	令和元年度
事業フェーズ	第1期:看護系大学教育のCQI実態解明	第2期:看護学教育CQIモデル開発	第3期:CQIモデルの活用推進	
CQIモデル開発	<ul style="list-style-type: none"> CQI全国調査(調査票作成) CQI事例研究準備 国内外機関ヒヤリング調査準備 	<ul style="list-style-type: none"> CQI全国調査(JANPU連携) CQI事例研究 国内外機関のヒヤリング調査 CQIモデル試案作成 	<ul style="list-style-type: none"> CQIモデルの活用説明会実施 活用協力校の募集、選定、ルールの決定と共有 CQIモデルの検証・精練・完成 	<ul style="list-style-type: none"> CQIモデル活用支援と効果の検証 CQI推進者研修プログラムの開発と実施 全国CQI調査の実施と分析
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> 個別CQI支援 各大学個別CQI支援(FDマザーマップ活用/FDコンサルテーション/CQIモデル活用推進) FDマザーマップ活用の効果検証 各大学要請対応型CQI支援 FDマザーマップ活用型FD支援 CQIモデル活用型CQI支援 各大学要請対応型CQI支援 FDマザーマップ活用型FD支援 CQIモデル活用型CQI支援 各大学要請対応型CQI支援 FDマザーマップ活用型FD支援 			
	<ul style="list-style-type: none"> CQI研修事業 CQIコンテンツ開発 CQI支援研修の拡充、およびFD&SDコンテンツ開発 看護系大学FD企画者研修(7月~11月) 看護系大学FD企画者研修(7月~11月) 看護系大学FD企画者研修(7月~11月) 看護系大学FD企画者研修(7月~11月) 看護学教育ワークショップ(10月) 看護学教育ワークショップ(10月) 看護学教育ワークショップ(10月) 看護学教育ワークショップ(10月) 看護系大学のCQIに関する課題認識の共有 看護系大学のCQIの実態共有と動機づけ支援 看護系大学のCQI活動の効果を自覚できる支援 看護学生の学修成果の向上と大学の機能強化に向けたCQIの支援 			
	<ul style="list-style-type: none"> JANPUとの連携準備への協議 研修事業のwebシステム開発 JANPUとの連携会議 看護学教育評価機構(仮)・大学教育イノベーション日本との連携体制の検討 研修事業webシステムの試用とCQI支援webシステムへの改善 JANPU・看護学教育評価機構(仮)・大学教育イノベーション日本との連携体制の検討 CQI支援webシステムの運用 ネットワーク型CQI相互支援体制構築準備 CQI情報の集約と発信に関する左記機関との調整と連携 CQI支援webシステムの活用評価 ネットワーク型CQI拠点形成 			
	<ul style="list-style-type: none"> 外部評価候補者の選定と打診 CQI研修広報 外部評価 CQI研修広報 CQI情報発信のHP改善 外部評価 CQI研修広報 CQI情報発信 外部評価 CQI研修広報 CQI情報発信 			
各年度の事業評価指標	<ol style="list-style-type: none"> CQI調査票試案の完成 研修事業webシステム試行版完成 CQI情報集約・発信数 大学の特性に応じた研修事業の活用度の上昇 JANPUとの質保証に関する連携および調査協力に関する合意 	<ol style="list-style-type: none"> CQI調査回収率、結果報告書 CQIモデル試案の可視化 CQI情報の発信数 大学の特性に応じた研修事業の活用度の上昇 JANPUとの結果および課題の共有 	<ol style="list-style-type: none"> CQIモデル活用支援システム試行版の完成 CQIモデル活用協力校参加数 CQI情報の発信数 大学の特性に応じた研修事業の活用度の上昇 JANPU等との連携に関する合意 ネットワーク型CQI相互支援参加大学明示 	<ol style="list-style-type: none"> CQIモデル活用支援webシステムの完成 大学の特性に応じた研修事業の活用度(件数、内容と効果)の上昇 CQI情報の発信数 ネットワーク型CQI相互支援拠点の形成およびセンターとの連携内容と件数



看護学教育CQIモデルVer.1

図1:看護系大学教員としての自己の立ち位置を見極めるための構造図





昨年度の 看護学教育ワークショップの成果

- テーマ:** 自大学の見方を変える、
CQIへのエネルギーを得る
- 内容:** CQIモデルVer.1を使ったワーク
- 成果:** モデル図からの気づきをきっかけとして、
他大学との相互比較が活性化
➢ 大学間相互の学び合いの促進
➢ 参加者がCQIへのエネルギーを得る

昨年度の看護学教育ワークショップ後の 当センターでの取り組み

- CQIモデルVer.1の活用効果を検証する
- CQIを推進するために必要な戦略活動を説明するモデル図(以下、実行モデル図)を新たに開発する
- CQI推進者に必要な能力を明らかにする



看護学教育のCQIに関する事例研究 —モデルVer.2開発に向けて—

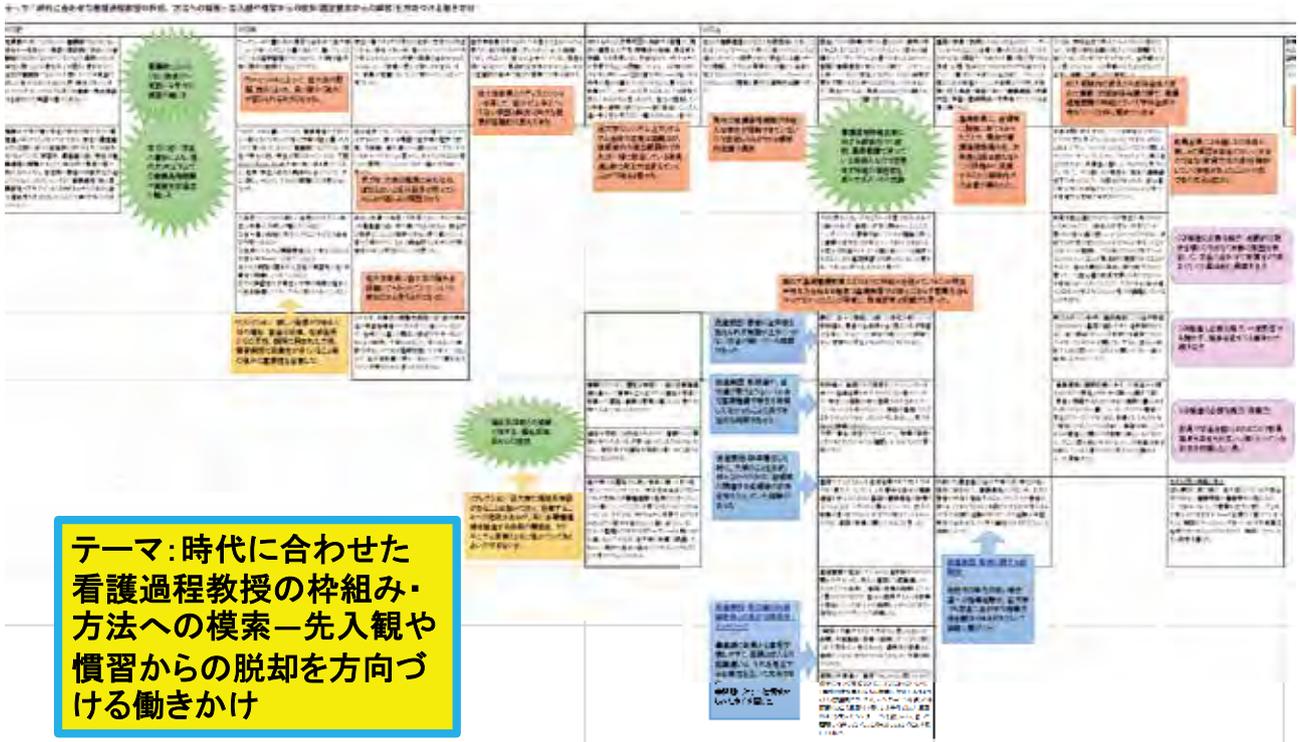
- 目的**
- 1) 看護学教育のCQIモデルver.1の効果を検証する。
 - 2) 看護学教育のCQIを推進するために必要な戦略活動を説明するモデル図(以下、実行モデル図)を開発し、CQIモデルver.2を開発する。
 - 3) 看護学教育のCQI推進者に必要な能力を明らかにする。

- 方法**
- ・看護系大学を対象とした個別事例研究
 - ・2018年度看護学教育ワークショップの全日程参加者のうち、フォローアップ調査において、当センターにサポートを希望し、連絡をとってもよいと回答した大学に、改めて依頼し、本研究への協力について同意を得た者を対象とした



結果

1. 対象者 10大学(国立1, 公立2, 私立7 多様な地域背景)
2. 事例大学のCQIの様相

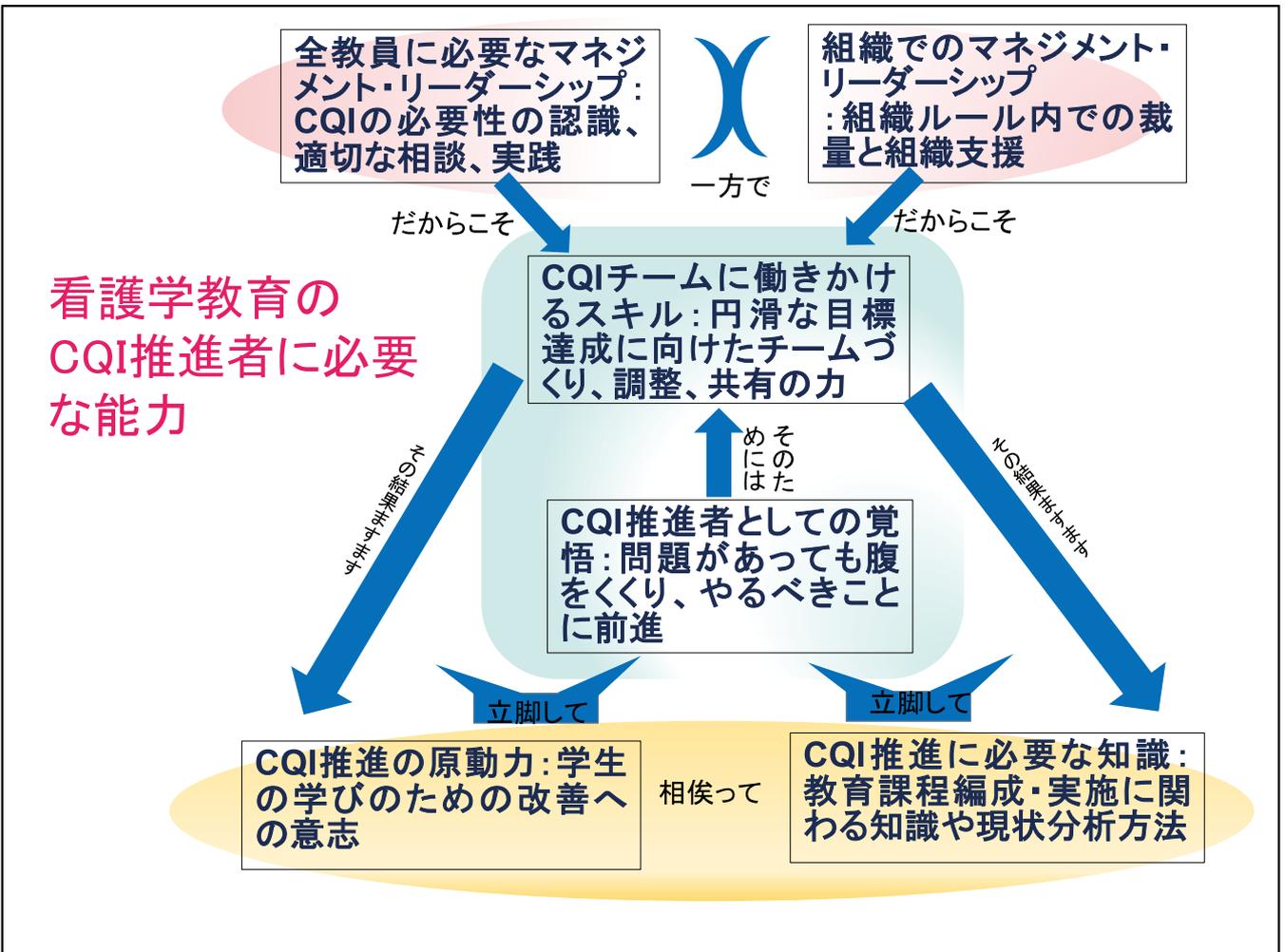
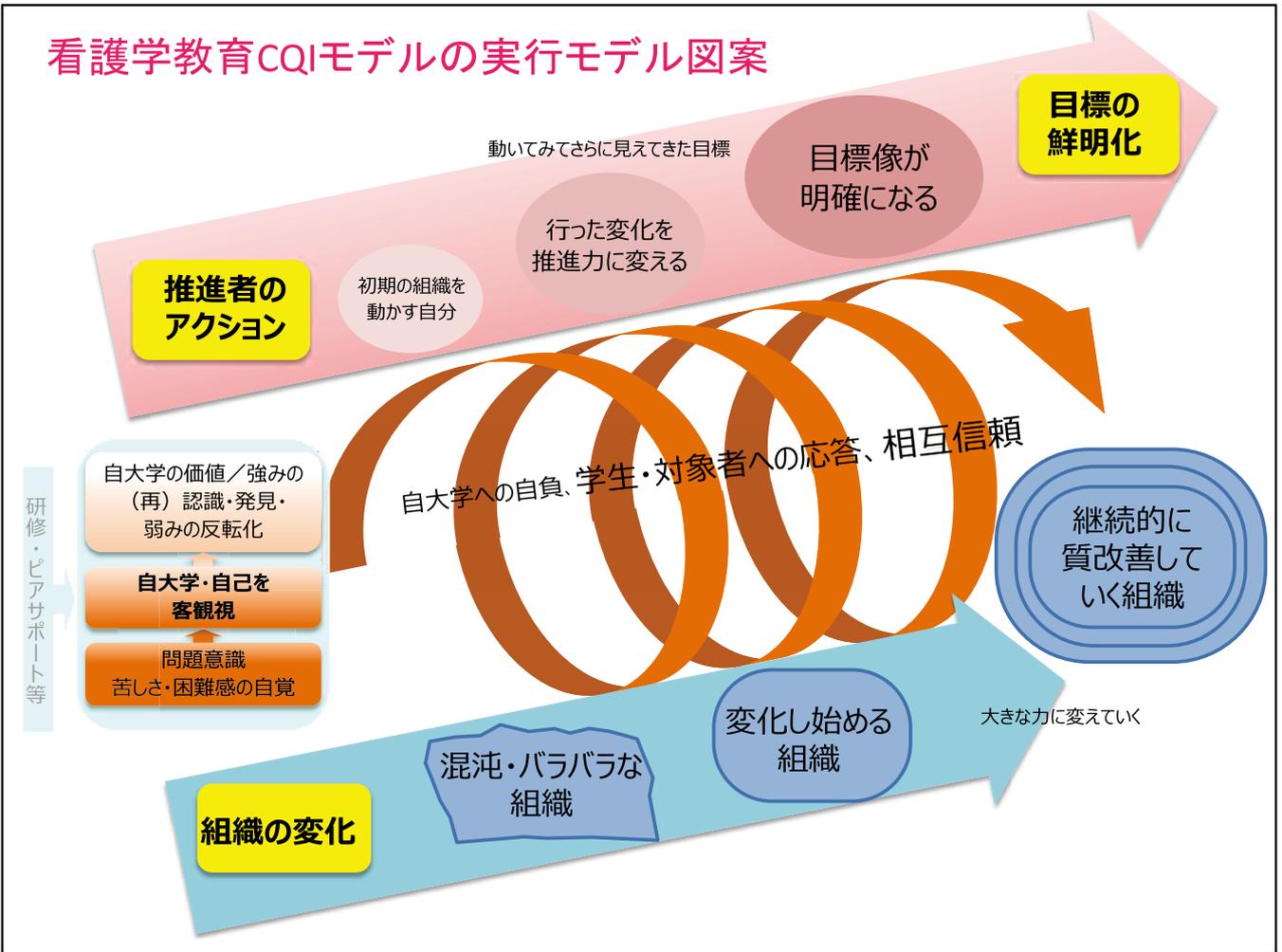


CQIのテーマの例

- ・積み重ね型学習である看護学教育における
教員間協働連携
—負担感改善への見える化—
- ・自大学地域に必要な看護職育成に向けた
ボトムアップ型CQI
- ・保健師選択制変更に伴う新カリキュラム検討CQI
—余裕の時間をフィジカルアセスメント強化へ—
- ・新設大学における学内合意形成と基盤づくりのための
FD企画



看護学教育CQIモデルの実行モデル図案



2019年度 看護学教育ワークショップの企画

テーマ: 多様なCQIをささえる

大学間相互支援ネットワークの力

目的: 参加者が自大学で看護学教育のCQIを推進することに向けて、CQIの実践者から学び、必要な能力を把握するとともに、大学間相互支援を通して各大学における多様なCQIの在り様を考えること、今後の大学間相互支援のネットワークを広げることを目的とする。



7. 講演「大学教育における内部質保証の動向」

公益財団法人大学基準協会 事務局長

工藤 潤 氏

看護学教育ワークショップ（千葉大学 2019.10.28）



大学教育における内部質保証の動向

公益財団法人大学基準協会

事務局長 工藤 潤

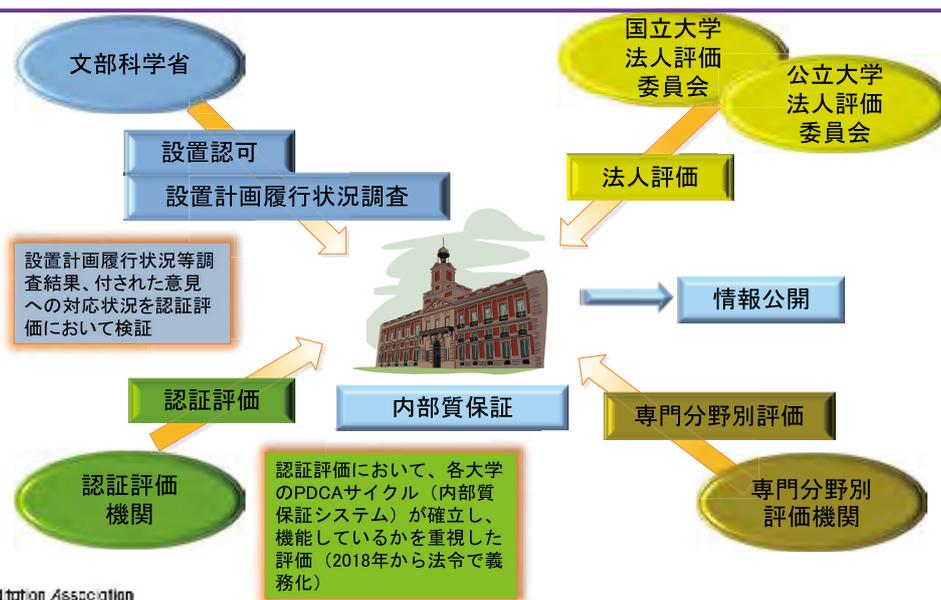
j_kudo@juaa.or.jp

Japan University Accreditation Association

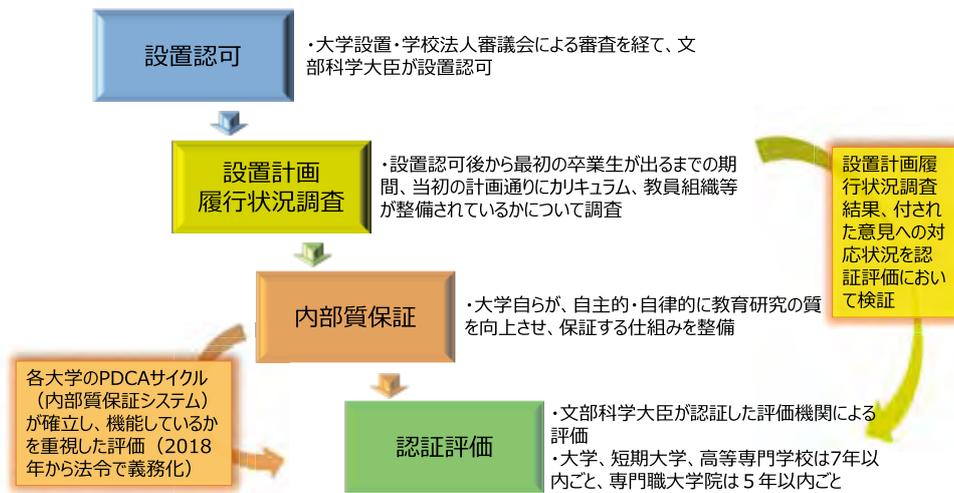
1

わが国の大学教育の質保証システム

はじめにー日本における質保証システムー



日本の質保証システムー設置認可から認証評価までー



認証評価に関する最近の法令改正



平成30年度からの認証評価制度の改革



(1) 評価内容の充実

(評価項目)

- 1 大学における教育研究活動等の見直しを継続的に行う仕組み（以下「内部質保証」という。）に関する事
- 2 卒業の認定に関する方針、教育課程の編成及び実施に関する方針並びに入学者の受入れに関する方針に関する事

(重点評価項目の設定)

- 3 内部質保証に関する事については評価において重視すべき事項とする事

(その他)

- 4 設置計画履行状況等調査における「警告」「是正意見」等への対応状況を把握する事

(2) 評価の質の向上

- 1 機関は、評価に関する規定や組織の運営状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表する事とする事
- 2 評価において改善等を大学に指摘した場合、当該大学からの求めに応じ、再度評価を行うよう努める事とする事
- 3 評価の過程において高等学校、地方公共団体、民間企業等の関係者から意見を聞かなければならない事とする事

令和2年度からの認証評価制度の改革



● 学校教育法第109条に以下の項が追加（改正部分）

5 第二項及び第三項の認証評価においては、それぞれの認証評価の対象たる教育研究等状況(第二項に規定する大学の教育研究等の総合的な状況及び第三項に規定する専門職大学等又は専門職大学院の教育課程、教員組織その他教育研究活動の状況をいう。次項及び第七項において同じ。)が大学評価基準に適合しているか否かの認定を行うものとする。

6 大学は、教育研究等状況について大学評価基準に適合している旨の認証評価機関の認定(次項において「適合認定」という。)を受けるよう、その教育研究水準の向上に努めなければならない。

7 文部科学大臣は、大学が教育研究等状況について適合認定を受けられなかつたときは、当該大学に対し、当該大学の教育研究等状況について、報告又は資料の提出を求めるものとする。



内部質保証のあり方



内部質保証と自己点検・評価

■ 内部質保証

- PDCAサイクル等を適切に機能させることによって、質の向上を図り、教育・学習等が適切な水準にあることを大学自らの責任で説明・証明していく学内の恒常的・継続的プロセス（大学基準協会の定義）



PDCAという改善のための循環サイクルを内包させて、このサイクルを恒常的・継続的に運用

■ 自己点検・評価

- 現状を把握し、それを分析して長所や問題点を捉え、長所についてはそれをさらに伸長させるための方策、問題点についてはその改善策を導き出すこと



一定の間隔を置いて定期的実施



内部質保証の目的

内部質保証の目的

意図した学習成果を生み出せるよう、学位プログラムを体系化することが重要

教育の充実と学生の学習成果の向上

学習成果を基軸に据えて内部質保証を捉える

内部質保証システムの構築と機能化

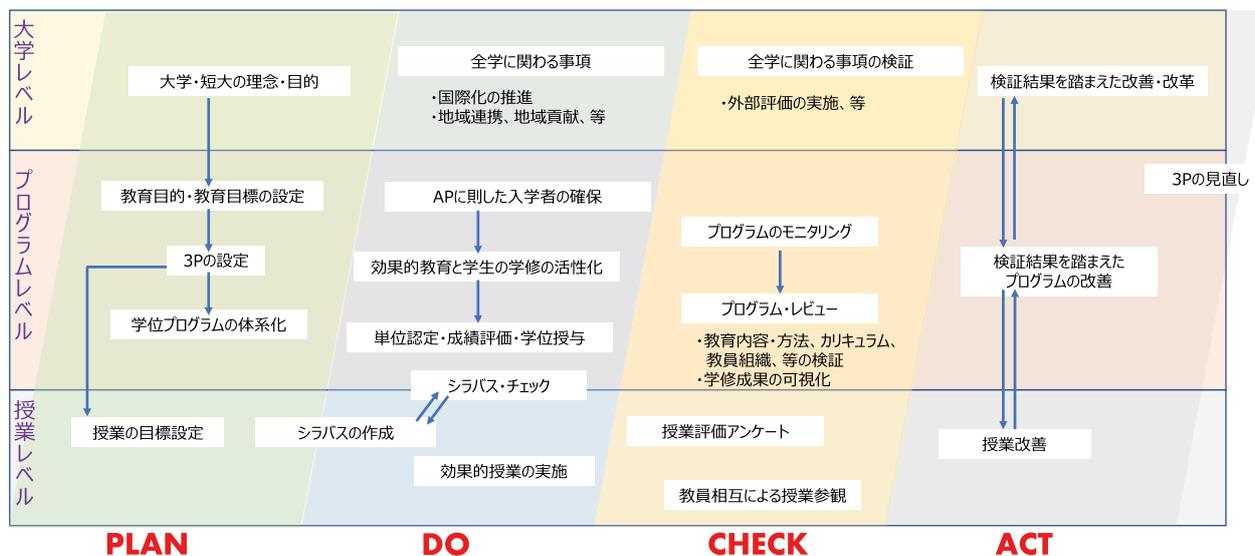
- ・大学・短期大学教育の充実と学習成果の向上に向けた教学マネジメント体制の確立と適切な展開

学部、研究科の内部質保証の実際のプロセス

- ・学習成果の向上に向けた各部局によるPDCAサイクル



3側面（大学、プログラム、授業のレベル）とPDCA



学部・学科によるPDCAの推進（1）



- 【学位授与方針】修得が期待される知識・技能・態度など当該学位に相応しい学習成果を学位授与方針の中で明確化する。



- 【教育課程の編成・実施方針】学位授与方針に整合した形で、教育課程の体系、教育内容、教育課程を構成する授業科目区分、授業形態等を示した教育課程の編成・実施方針を作成する。

- 【学生の受け入れ方針】編成したカリキュラムを受けるに相応しい資質を備えた入学者を確保するなど内容を、学生の受け入れ方針を作成する。

学部・学科によるPDCAの推進（2）



- 学習成果の修得のためにふさわしい授業科目を適切に開設し、順次性に配慮した体系的カリキュラムを編成する。

- 学習成果を修得させるために、学生の学習の活性化を図り、効果的な教育を行う。



- あらかじめ学生に明示した方法及び基準に基づく厳格かつ適正な成績評価及び単位認定を経て、適切な責任体制及び手続による学位授与を行う。

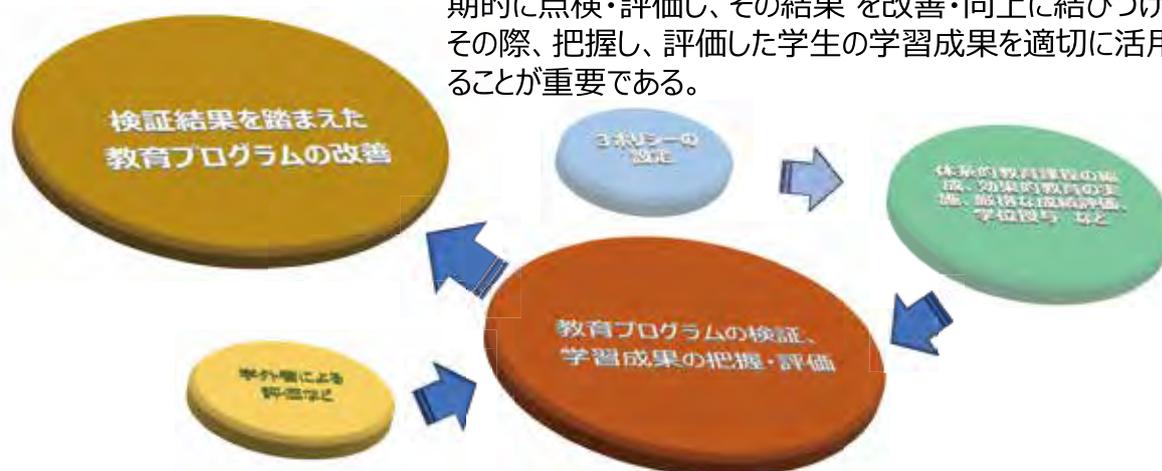
学部・学科によるPDCAの推進 (3)

- 学位授与方針に示した知識、技能、態度等の学習成果を学生が修得したかどうかを把握し、評価する。
- そのために、学習成果を様々な観点から把握し評価する方法や指標を開発し、それらを適用する。
- 学外者による評価などを取り入れ、教育プログラムの検証等に対する客観性、妥当性を担保する。
- カリキュラムの体系的性、教育方法の有効性、教員組織の適切性、等を評価する。



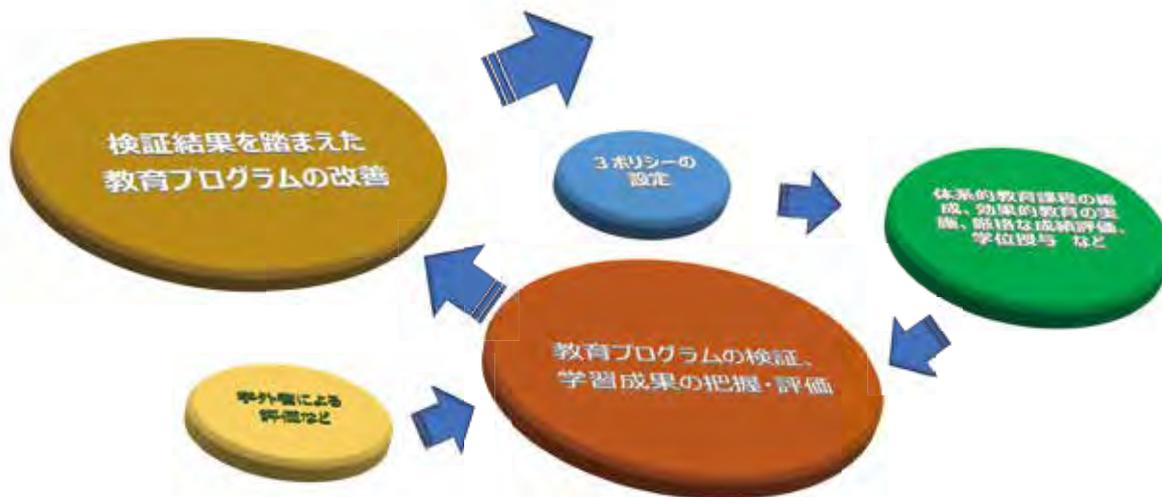
学部・学科によるPDCAの推進 (4)

- 大学は、教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価し、その結果を改善・向上に結びつける。その際、把握し、評価した学生の学習成果を適切に活用することが重要である。





学部・学科によるPDCAの推進 (5)

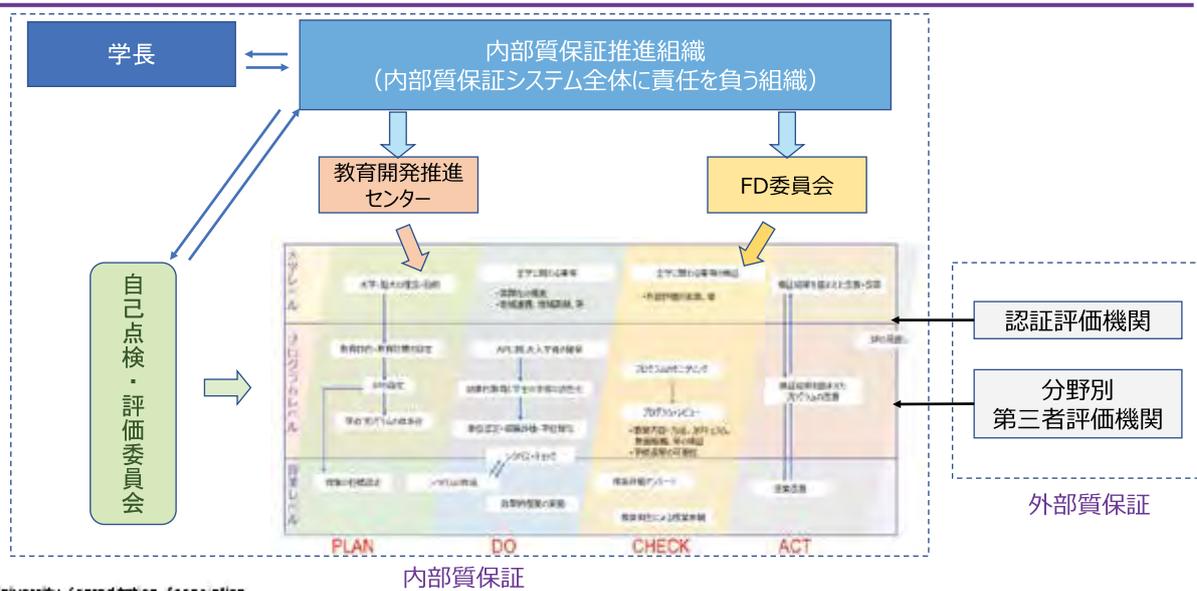


Japan University Accreditation Association

16



大学・短大の内部質保証システム体制 (例)



Japan University Accreditation Association

内部質保証システム構築のための条件



■内部質保証に関する方針

- 内部質保証に関する大学・短期大学の基本的な考え方

内部質保証の目的、内部質保証の対象とする範囲、内部質保証の責任体制、等

■内部質保証体制

- 内部質保証の推進に責任を負う全学的組織の設置
- 同組織を支える事務局機能の確立

構成メンバー、全学組織の権限を定めた規定の整備
学内の他の委員会、部局との関係、役割・権限の明確化

■PDCAサイクル（改善のための循環サイクル）

- プログラムの企画・設計、管理、検証、改善の仕組みの整備

■検証システムの確立

- 学生の学習成果の測定方法の開発、成果の可視化

科学的根拠に基づく検証



エビデンス・ベース

■情報公開

- 正確な情報、一定水準に到達していることの説明・証明

Japan University Accreditation Association

2018年度認証評価結果の概要



申請大学の内訳

設置形態	大学数	割合
国立大学法人	0	0.0%
公立大学法人	3	11.1%
法人化していない公立大学	2	7.4%
私立大学	22	81.5%
合計	27	100.0%

判定結果

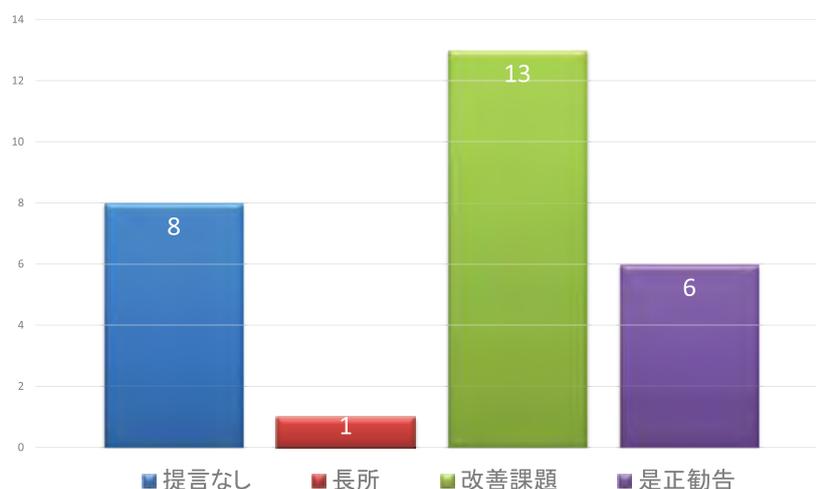
判定	大学数	割合
適合	25	92.6%
保留	2	7.4%
不適合	0	0.0%

Japan University Accreditation Association

2018年度認証評価結果の概要



基準 2 - 内部質保証における提言別大学数



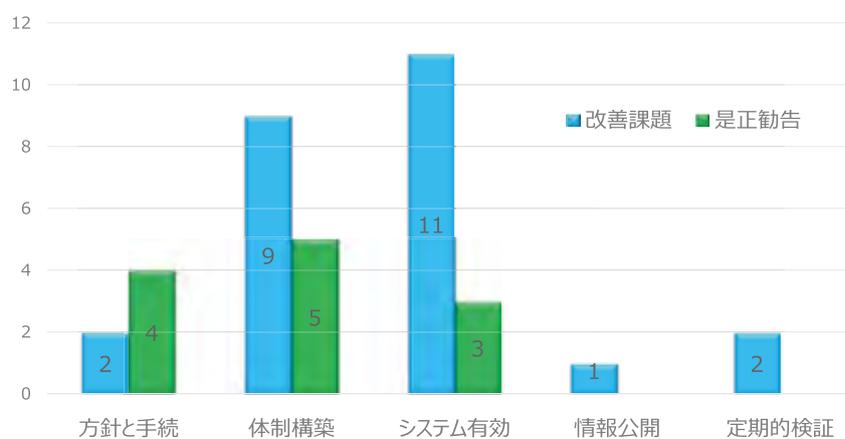
※ 27大学中、1大学は、「改善課題」と「是正勧告」を受けている。

Japan University Accreditation Association

2018年度認証評価結果の概要（基準 2 内部質保証）



基準 2 - 内部質保証における提言内容別大学数



Japan University Accreditation Association



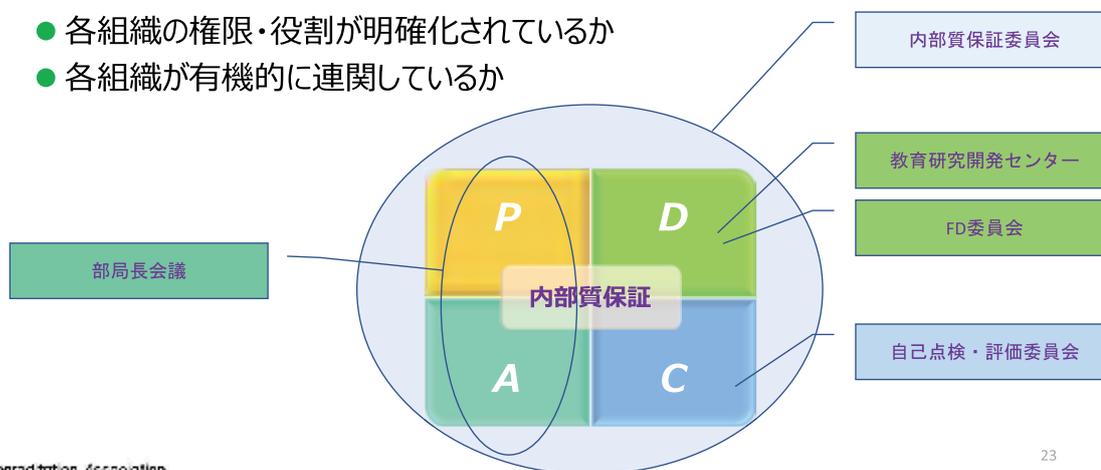
「方針と手続き」及び「体制構築」における問題点（2018年度）

- 「内部質保証委員会」と「自己評価委員会」の役割分担と連携のあり方が規程上明確にされていない。
- 内部質保証システムを実質的に機能させ、改善に向けた取組を着実にこなしているものの、内部質保証に関する全学的方針に各組織の権限・役割が明示されていない。
- 内部質保証に関する方針を定めているものの、規程と実態との間に乖離が見られる。
- 内部質保証の取組が全学的な責任主体のもと一貫したプロセスとして機能する体制が十分ではない。
- 内部質保証の推進及び統括を担う組織として「教学改革推進会議」を設置したものの、同会議が担う内部質保証の範囲に教育研究組織及び教員・教員組織は含まれていないことに加え、同会議と既存の「全学点検評価委員会」やその他の全学的組織との役割分担及び連携プロセスが十分に整理されていないことなど、内部質保証体制には不備が見られる。



内部質保証の課題

- 組織間の役割分担の明確化
 - どの組織が全学的内部質保証に責任を負っているのか
 - 各組織の権限・役割が明確化されているか
 - 各組織が有機的に連携しているか

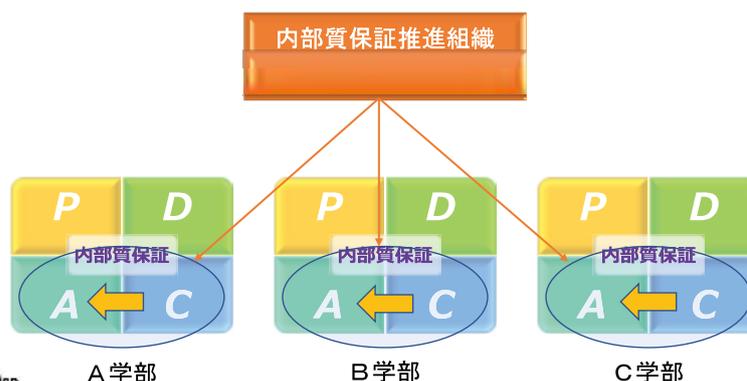


内部質保証の課題



■ 自己点検・評価の実質化

- 自己点検・評価結果を改善に活かしているか
- 内部質保証推進組織が、各部局に対して自己点検・評価結果に基づく改善を促しているか。



Japan University Accreditation Association

24

「システムの有効性」における問題点（2018年度）



- 内部質保証の基盤として位置付けている自己点検・評価について、全学的な観点で評価を行うとしている「内部評価委員会」がその役割を果たしておらず、自己点検・評価が十分に機能していない。
- 毎年の自己点検・評価を実施し、それに基づく改善は各学科等が実施しているものの、その他の教育研究活動に関する委員会報告はそれぞれを所管する審議会が点検・評価することどまり、自己点検・評価の結果を用いて改善・向上に取り組むプロセスが築かれていない。
- 「自己点検・評価委員会」は各学部・研究科による自己点検・評価の結果報告を受け、その内容を共有すること等にとどまっているなど、各学部・研究科の点検・評価結果を踏まえた改善・向上に向けた取組を全学的に推進しているとは言い難いことから、これに関わる諸組織の権限・役割分担を明確にし、内部質保証システムを有効に機能させるよう、改善が求められる。

Japan University Accreditation Association

25



学習成果の重視 － 学習成果の設定 －



学習成果の設定（1）

■大学（学位プログラム）共通の学習成果の設定

- 大学の理念・目的を踏まえつつ、「学生は卒業後、社会でどのような能力を必要とするのか」に留意する
- 「学士力」、「社会人基礎力」を参考にする大学が多い

■学位プログラム単位の学習成果の設定

- 各学位プログラム単位の、卒業までに獲得させる学習成果を設定する
- 専門分野別評価機関（JABEE、JACMEなど）や「分野別参照基準」（日本学術会議）などを参照する
- 学位プログラム（124単位）は、初年次教育、教養教育、キャリア教育等も含まれていることに留意する

■授業科目単位の学習成果の設定

- 学位プログラムを構成する個々の授業科目での学習成果を設定する
- 個々の授業で、学位プログラムのすべての学習成果を達成することは不可能
- カリキュラムマップの活用

中教審「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（2008） において提言された「学士力」



- 学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）への学修成果（4年間の学士課程教育を通じて修得が期待される知識・能力・技能）の明示

学士力

- 「**知識・理解**（多文化・異文化の知識の理解，人類の文化，社会と自然に関する知識の理解）」
- 「**汎用的技能**（コミュニケーション・スキル，数量的スキル，情報リテラシー，論理的思考力，問題解決力）」
- 「**態度・志向性**（自己管理能力，チーム・ワーク，リーダーシップ，倫理観，市民としての社会的責任，生涯学習力）」
- 「**統合的な学習経験と創造的思考力**（これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し，自ら立てた新たな課題にこれらを適用し，その課題を解決する能力）」

学習成果の設定（2）



大学の学習成果と学位プログラムの学習成果の整合性の確認（大阪大学の例）（『学習成果ハンドブック』より）

No.	〈学位プログラム〉における学習目標	全学学習目標				全学学習目標に該当しない目標項目
		識と深い専門知識	高度な専門知識	教養	デザイン力	
	〈記入例〉文学部のディプロマポリシー（抜粋）					
	多くの事象にわたる幅広い総合的な人文学的教養と、人文学を超えて学問全般にわたる広い教養を身につけている	○	○			
	国際的活動を基盤として、2以上の外国語の運用能力並びに異文化理解の能力を身につけている				○	
	専門的知識を系統立てて身につけている	○				
	専門分野における次の研究と方法と能力を身につけている ○日本語や外国語で、研究成果や自分の知見を分かりやすく発信するデザイン力				○	



学習成果の設定（3）

■学習成果の記述方法

- ブルームの提案した「教育目標の分類学」（タキソミー）の活用

■「教育目標の分類学」（タキソミー）を活用した記述法

- 認知的領域（学生は、何を知り、理解できるべきか）
 - 知識、理解、応用、分析、総合、評価
- 情意的領域（どのような学生であるべきか）
 - 興味・関心、価値観、態度
- 運動的領域（学生は何ができるべきか）



学習成果の設定（4）

■学習成果の記述方法

- 何ができるようになるかを、できる限り具体的に
- 学習成果の到達度が測定可能（アセスメントが可能）な表現にする
- 学習成果の獲得が、学生のわずか数名では、学習成果としては不適切。達成可能なものを設定する
- 学生が習得した学習成果が、大学での学習や社会生活において「無意味」な性格なものではないこと、「現実的」であること

■SMART法

- Specific（具体的）
- Measurable（測定可能）
- Achievable（達成可能）、Ambitious（意欲的）
- Realistic（現実的）
- Time scaled（一定の時間内）、Time bound（期間の設定）



学習成果の重視 － 学習成果を達成するための取組 －



学習成果を達成するための取組（1）

- 学習成果を修得させるための体系的教育課程の編成、効果的教授法の開発
 - 「個々の教員の責任に委ねられ、教員の専門性に引き付けた授業」から「大学教育の組織的展開」へ
- カリキュラム・マップによる学習機会の保証

	科目A	科目B	科目C	科目D	科目E
学習成果1	導入 (1年前期)	発展 (2年前期)		応用・確認 (3年後期)	
学習成果2					
学習成果3		導入 (2年前期)		発展 (3年後期)	応用・確認 (4年前期)
学習成果4					

『学習成果ハンドブック』（大学基準協会）、2018年3月 より



学習成果を達成するための取組 (2)

■シラバスへの明示

- それぞれの授業科目で獲得を目指す学習成果と学位プログラムのディプロマ・ポリシーとの関連性を、各授業科目のシラバスで明示する

■シラバスの例

授業科目名	〇〇史概論		
担当教員名	△△△△		
授業コード	XXXXXXXX	開講学期	前期
単位数	2.0	配当年次	3年
授業のテーマ・概要	テーマ:〇〇における〇〇の展開 〇〇〇〇の展開を概観し、〇〇〇〇の特質を探る		
授業の到達目標	1) 〇〇と□□の関係性について説明できる 2) 〇〇の史的意義について説明できる ⋮		

ディプロマ・ポリシーと
学習成果との対応
関係を明記

『学習成果ハンドブック』（大学基準協会）、2018年3月 より



学習成果を達成するための取組 (3)

■学習成果を獲得できる教育・学習方法の開発

- 「何を教えるか」から「何ができるようになるか」 ⇔ 教育内容以上に、教育方法の改善が必要
- 学習意欲や目的意識の希薄な学生に対し、どのような刺激を与え、主体的に学ぼうとする姿勢や態度を持たせるか
- 「課題探求や問題解決等の諸能力を中核」とする学士力を修得させるために、「既存の知識の一方向的な伝達だけでなく、討論を含む双方向型の授業を行うことや、学生が自ら研究に準ずる能動的な活動に参加する機会を設けることが不可欠である。研究という営みを理解し、実践する教員が、学生の実情を踏まえつつ、研究の成果に基づき、自らの知識を統合して教育に当たることが改めて大切な意義を有する。すなわち、教育と研究との相乗効果が発揮される教育内容・方法を追求することが、ユニバーサル段階の大学にとって一層重要である。」

(中教審「学士課程教育の構築に向けて(答申)」(2008)より抜粋)



学習成果の重視 － 学習成果の測定 －



学習成果の測定（1）

■ 学習成果の測定（アセスメント）の目的

単位	対象	目的
大学レベル	サンプル	教育改革、認証評価、アカウンタビリティ
教育プログラムレベル	サンプル	プログラム改革、認証評価、アカウンタビリティ
授業レベル	受講生全員	授業改善

■ 測定（アセスメント）の2つの側面

- 「総括的アセスメント」： 学期末もしくは卒業時に学習到達度を測定するもの
- 「形成的アセスメント」： 学期中に学習状況を測定し学習指導に活かすもの



学習成果の測定（2）

■ 学習成果の測定（アセスメント）の2つの方法

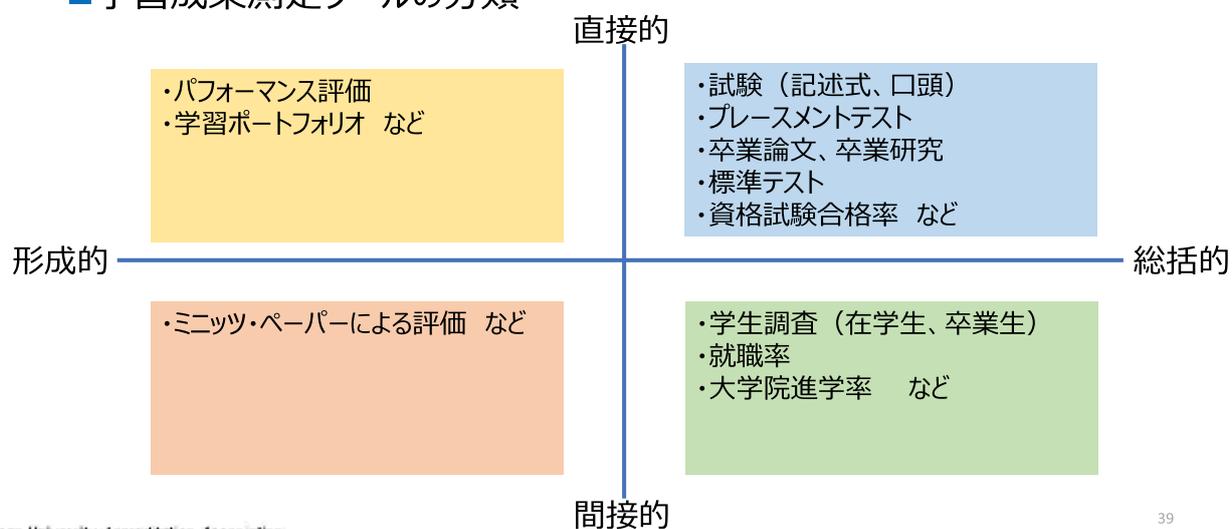
- 直接的測定 : 学生の知識や技能の表出を通じて、学習成果を直接的に評価
➤ 「何ができるか」
- 間接的測定 : 学生の学習行動や学習についての自己認識を通じて、学習成果を間接的に評価
➤ 「何ができと思っているのか」

『『学習成果』の設定と評価-パフォーマンス評価を中心に-（松下佳代講演記録）』『学習成果の設定と評価-アカデミック・スキルの育成を手かがり-』（立教大学大学教育開発・支援センター）より



学習成果の測定（3）

■ 学習成果測定ツールの分類





パフォーマンス評価

■パフォーマンス評価とは

- 単に知識を修得し、理解しているだけでなく、実際に何かをさせる（プレゼンテーションなど）、何かを作られせる（レポートなど）ことを通じて、直接的に評価すること
- 形成的評価（改善志向型）、学習とアセスメントとの一体型
- 効果的アサインメント（課題）とルーブリックの作成
 - なぜこの課題を与えるのか、完成した課題はどのようなものであるべか、学生はどのようにして課題を仕上げるか、課題をどのようにして評価するか、等を踏まえて、課題を設定する
 - ルーブリック（評価基準表）を学生と共有する

リンダ・サスキー『学生の学びを測る アセスメント・ガイドブック』（齋藤聖子訳）玉川大学出版部、2015 参照



ルーブリックの作成（1）

■ルーブリック

- パフォーマンスの質を**段階的・多面的**に評価するための評価基準表
- 段階的：通常、3段階から6段階ぐらいのレベルを設定（評価尺度）
- 多面的：1つのパフォーマンスを様々な角度から見る（評価観点）

ルーブリックの様式例

課題 ○○○……………

	評価尺度 1	評価尺度 2	評価尺度 3	評価尺度 4
評価観点 1	評価基準 1-1	評価基準 1-2	評価基準 1-3	評価基準 1-4
評価観点 2	評価基準 2-1	評価基準 2-2	評価基準 2-3	評価基準 2-4
評価観点 3	評価基準 3-1	評価基準 3-2	評価基準 3-3	評価基準 3-4
評価観点 4	評価基準 4-1	評価基準 4-2	評価基準 4-3	評価基準 4-4

ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ『大学教員のためのルーブリック評価入門』（佐藤監訳、井上・俣野訳）玉川大学出版部、2014 より 抜粋



大学基準協会の認証評価における 学習成果の取り扱い



学習成果の明確化、教育活動、学習成果の測定、 測定結果の活用の連動性



■ 修得が期待される知識・技能・態度など当該学位に相応しい学習成果の明確化

- ✓ 3ポリシーの設定
- ✓ 3ポリシーの連関性の確保

■ 学習成果を修得させるための授業内容、授業科目の体系的編成、効果的な教授法の開発

- ✓ 授業の目標設定
- ✓ カリキュラムマップ、カリキュラムツリーの作成
- ✓ ナンバリング
- ✓ シラバスのチェック
- ✓ 学修成果基盤型教育（OBE）の実施

■ 明確化した学習成果の測定方法の開発及び測定

- ✓ 多角的方法によるアセスメント
- ✓ 直接的、間接的手法の導入
- ✓ アセスメント・ツールの適切な選択

■ 可視化された学習成果の活用法

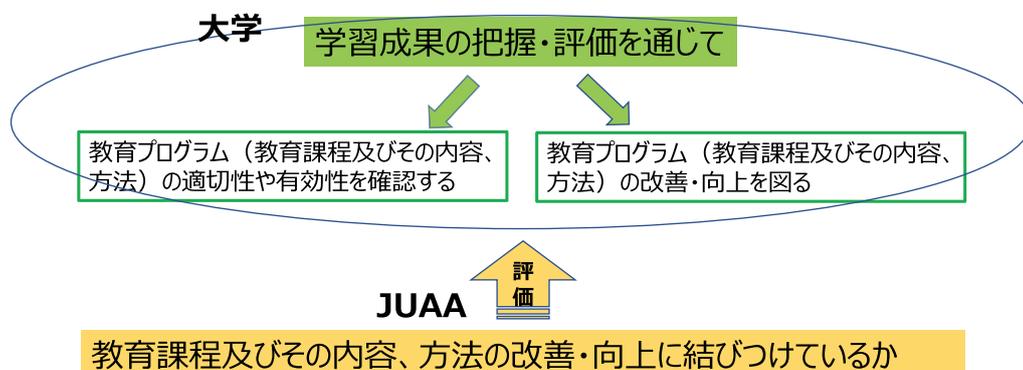
- ✓ 教育プログラムの改善
- ✓ 説明責任
- ✓ 成績評価
- ✓ 認証評価

認証評価における学習成果の取り扱い (1)



認証評価における学習成果の取り扱い (2)

- (大学基準の解説) 大学は、教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価し、その結果を改善・向上に結びつける。その際、把握し、評価した学生の学習成果を適切に活用することが重要である。



「学習成果の把握・評価」における問題点（2018年度）



■27大学中22大学が「改善課題」の指摘を受ける（約8割）

- ○○研究科及び□□研究科における学位授与方針に明示した学生の学習成果の把握及び評価については検討段階にあり、十分に実施されていないため、改善が求められる。
- ○○学部○○学科及び△△学研究科では、学習成果の測定に関する組織的な検討が行われておらず、退学率や留年率、国家試験合格率等を用いて把握・評価できているとはいいがたい。学習成果を効果的に測定するとともに、その結果を教育内容・方法の改善に生かしていくよう、全学的な検討に基づいて改善することが求められる。
- G P Aの分析を行い、学生指導に活用しているものの、その内容は成績評価の分析にとどまっており、学位授与方針に示した学習成果の把握・評価は十分に行われていないため、改善が求められる。



内部質保証システムの運用のあり方 —『内部質保証ハンドブック』（大学基準協会）から—



内部質保証は、認証評価の対応ではなく、学生の「学習成果」を向上させたいという教職員の願いを共有することを出発点に

■学生の学習成果を向上させる

- 学生の学習を質・量の両面で充実を図る
 - 学生の学習時間をいかに増やすか
 - 学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学習にいかに転換させるか

■教育目的や学生の実態にふさわしい方法で、学生の学習の質的・量的充実を図ることが内部質保証の目指すものであることを教員・職員が共有する



内部質保証は、「学位プログラム」の設計・管理・評価・改善のPDCAサイクル全体の営みであるとの理解を共有する

■内部質保証システムにPDCAの循環サイクルを内包させ、このサイクルを恒常的・継続的に運用する

- 3ポリシーの策定を目指すものは、学習成果に基づく学位プログラムの体系化によって大学教育の質保証
- 学位プログラムの体系化とは、意図する学習成果が生み出せるよう、プログラムの構成要素である教育課程、教育・学習活動、成績評価等を相互に整合させて、系統的に統合させること
- 学位プログラムの体系的構築は、内部質保証の根幹をなすもの



「評価」の前に、「設計」および「管理」が内部質保証にとって極めて重要

- 内部質保証のすべては、「設計」（デザイン）からはじまる
 - 学位プログラムの入口（対象となる学生層）、過程（教育内容と教授・学習法）、出口（学習成果）を首尾一貫したロジックで統合する「設計」が必要
- 「設計」された学位プログラムを適切に実施する「管理」（マネジメント）が大切
 - 例えば、履修指導体制の確立、成績評価基準の適切な設定・運用、日常的な教育改善としてのFDの実施、など



全学のみならず学部・研究科等においても「教学マネジメント」とガバナンスを確立することが肝要

- 「全学的教学マネジメントの下で改革サイクルが確立しているかどうかなど、学習成果を重視した認証評価」が必要（中教審「質的転換答申」）
 - 概して、学部・学科任せの傾向があり、大学全体としての組織的取組が弱いという問題意識に基づくもの
- 学位プログラムを担う主体は学部・学科、研究科であることから、部局レベルでの「教学マネジメント」と「ガバナンス」の確立も必要



全学レベル（マクロ）、プログラムレベル（ミドル）、授業レベル（ミクロ）を関連づける

- 全学及び学部・研究科等の両レベルの教学マネジメントは、相互に整合性を持って統合された学内システムとして構築される必要がある
- 教員は、担当する授業科目で受講生に期待する学習成果を学位プログラムの学位授与方針内の学習成果に関連づけながら、授業を設計する
- 関連性を持たせるためには、シラバスの組織的作成と点検が必要



評価ツールや小道具よりも、全体のロジックと大学独自のストーリーが大切

- 学生調査、アセスメント・テスト、ルーブリック、ポートフォリオ等の評価ツール、CAP制、コース・ナンバリング等の小道具を設定することが自己目的化していないか
- 学生が修得することが期待される知識・能力等を学習成果として特定し、そうした学習成果を生み出せるよう、大学の歴史、規模、使命、教育理念などを踏まえて、教育課程、教授・学習活動、成績評価等を見直し、必要な修正・改善を加え、学位プログラムとして構築し直す

内部質保証は、教員・職員や教員組織・事務組織を活性化し、教育におけるイノベーションを促進するものでなければならない



- 内部質保証は、大学の個性・特色を生かした教育のイノベーションを促進する積極的な性格なものにするべき
- そのためには、学部・研究科等の教員組織・事務組織や個々の教員・職員の新たな試みへのチャレンジを後押しするような前向き志向と柔軟性が必要
 - 大学教育を各自バラバラの授業の寄せ集めから学位プログラムへ転換する過程において、教員間や教員・職員間でより緊密な連携協力により、同僚性的関係や組織的取組が強化される

個々の教員の授業と学生の学習成果の営みにインパクトを及ぼし、学習成果志向の教育を実質化させることこそ、内部質保証の究極的目的



- 教育改善や質保証のための取組が、名目的なものにとどまり、教員組織や教員の意識・実践に実質的なインパクトをもたらしていない
- 質保証がコンプライアンスにとどまり、学習成果の向上に結びつく教授・学習過程にインパクトをもたらすものになっていない
- 教職員が願う学生の学びの達成（学習成果志向の教育の実質化）こそ、内部質保証の出発点であると同時に、目指すべき到達点



参考文献

- 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（答申）」2008年12月
- 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」2012年8月
- 大学基準協会認証評価結果 <https://www.juaa.or.jp/accreditation/institution/result/>
- 『内部質保証ハンドブック』、大学基準協会、2015年7月
- 『学習成果ハンドブック』、大学基準協会、2018年3月
- 『学習成果』の設定と評価-パフォーマンス評価を中心に-（松下佳代講演記録）『学習成果の設定と評価-アカデミック・スキルの育成を手かがり-』（大学教育開発研究シリーズNo.22）立教大学大学教育開発・支援センター、2015年3月
- ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ『大学教員のためのルーブリック評価入門』（佐藤監訳、井上・俣野訳）玉川大学出版部、2014年
- リンダ・サスキー『学生の学びを測る アセスメント・ガイドブック』（齋藤聖子訳）玉川大学出版部、2015年

Japan University Accreditation Association



ご清聴ありがとうございました

公益財団法人 大学基準協会
工藤 潤

Japan University Accreditation Association

57

8. 報告「CQI 実践事例」

鳥取大学医学部保健学科 教授
深田 美香 氏



報告「CQI実践事例」



2019年10月28日
鳥取大学医学部保健学科看護学専攻
深田美香



Faculty of Medicine Tottori University

目次

1. 鳥取大学医学部保健学科
看護学専攻の特徴
2. 教育上の課題と未来予想図
3. 現在進行中の取り組みの紹介
4. (CQIの観点から)取り組み内容の
捉え直し
5. まとめ CQI推進上の課題



1. 本学の特徴

- ・看護教育：
大正14年 財団法人米子病院看護婦・産婆養成所
昭和26年 医学部附属看護学校
昭和50年 医療技術短期大学部
看護学科
平成11年 保健学科看護学専攻
- ・教員組織 4講座 35名
教授 11名 准教授 3名 講師 11名 助教 10名
(医師 4名 共通教育担当者 2名)
- ・カリキュラムの特徴
看護師・保健師 統合カリキュラム
助産師 10名程度選抜
コミュニケーション能力の育成

2. 教育上の課題(と未来予想図)



“私が感じていた”**素朴な**教育上の課題

ミッション、3つのポリシーはあるけれど、**教員と学生が共有**して、日頃の教育に生かされている？

教員同士で“看護”や“教育”を語っている？

学生「先生たちが使う言葉が微妙に違っていて混乱する」

教員は、学生にどのような能力を身につけてもらいたいか、**自分の言葉**で語れる？

教員は**楽しく**仕事してる？

夢と希望に溢れている1年生、、、
だんだん疲れていない？

2. (教育上の課題と)未来予想図



“私が思い描く”**素朴な**未来予想図

学生にどのような能力を身につけてもらいたいか、
教員は自分の言葉で語り、教員同士で共有したい
そして、そのプロセスを楽しみたい！

学生と教員で、
“学生の卒業時の姿”
を共有したい

卒業後の学生の成長を
信じて基礎教育に携わ
れる組織でありたい

ディプロマポリシーを具体化し、学生の成長を捉え
つつ(学生と共有し)、学生の成長を支援することを
共有できる(喜びを感じる)組織でありたい

はじめの一步

- ・2014年 かりけん(カリキュラム検討会)スタート
ディプロマポリシーから2つの能力をピックアップ
豊かなコミュニケーション能力
⇒ コミュニケーションと人間関係
あらゆる対象の健康生活の実現をめざした実践
⇒ 健康課題解決
コンピテンシーの段階的獲得の道のりを示した
ルブリックの作成

関係性中心とするケアを実践するための
基盤となる能力(関係性形成能力)

対象に価値ある変化をもたらす
看護を実践する能力(健康課題解決能力)

次のステップへ

- ・2015年 かりけん(カリキュラム検討会) 専攻全体へ
A 全学ポリシー、医学部ポリシー、専攻ポリシーの
整合性をはかりつつ、カリキュラム構造図を検討
B 学生のコミュニケーション能力の評価と教育提言
C ディプロマポリシーから3つの能力をピックアップ
コンピテンシーの段階的獲得の道のりを示した
ルブリックの作成

対象を大切にし、支える能力
(倫理的能力)

チームを形成し、チーム力を発揮するために
連携・協働する能力(連携・協働能力)

専門性を深めていく能力
(専門性追求能力)

教員みんなで共有していったこと

- ・2015年～ 年2回 看護学専攻FD
各グループの進捗状況の報告と意見交換
5つのコンピテンシーマトリックスの洗練化



- ・学生の卒業時の姿を具体的にイメージし、
共有できてきた
- ・コンピテンシーを構成する要素を考えることで、
看護実践に必要な能力を共有できてきた
- ・ルブリックの活用方法の検討から、
学生の成長を支える教員の役割を
考えることができてきた

直面した(している)課題

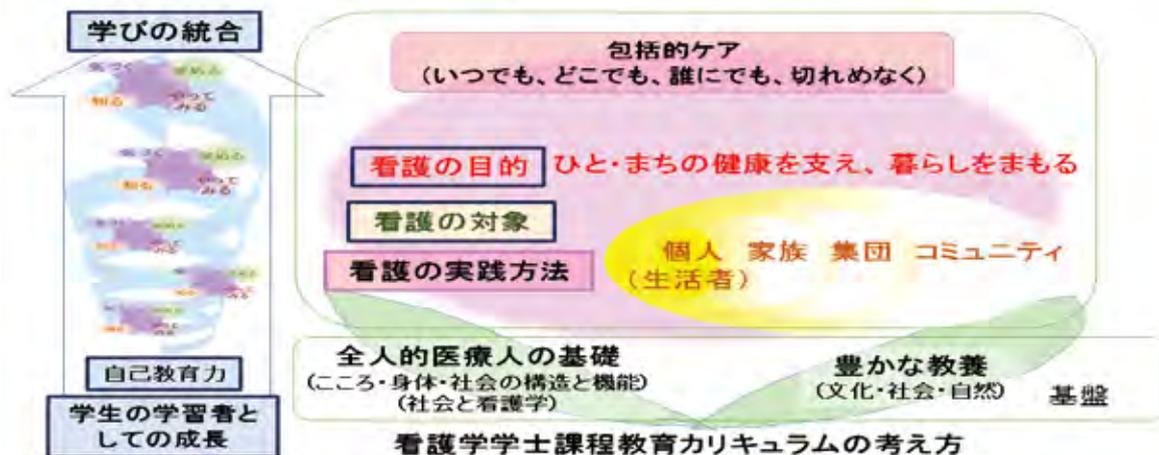
- ・担当領域の専門性
- ・教員個人の看護や教育についての価値観



- ・“領域”を語る前に“看護学”を語る
- ・教える側ではなく、
常に主体的学習者である学生主体の発想
- ・教員の考え方を統一するのではなく、
教員同士で**お互いの考えをわかろう**とすること、
お互いに良い影響を受け合えるようにすること
- ・常に、部分最適ではなく、学生にとっての全体最適を追究
- ・最適案で議論を前に進め、必要な後戻りを恐れない

卒業時に獲得される能力

- I. 関係性を中心とするケアを実践するための基盤となる能力(関係性形成能力)
- II. 対象を大切にし、支える能力(倫理的な能力)
- III. 対象に価値ある変化をもたらす看護を実践する能力(健康課題解決能力)
- IV. チームを形成し、チーム力を発揮するために連携・協働する能力(連携・協働能力)
- V. 専門性を深めていく能力(専門性追求能力)



I 関係性を中心とするケアを実践するための基盤となる能力(関係性形成能力)

定義: 看護師が意図的に対象との間に関係性を構築し、維持、発展する能力. 看護専門職として成長し、自己の成長と援助関係を相互に補完し発展させていく能力

次元	看護者がめざす目標	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	レベル0	評価の理由・課題
1. 人間関係の形成	表現力						
	解読力						
	関係形成力						
2. 援助的人間関係の形成	能動的関心						
	感情を受けとめる						
	個別性の尊重						
	体験の共有						
3. 対象との関係における自己の客観的評価	3. 対象との関係性を通して自己の傾向や価値観に気づき、(反省的実践家として)常に自分の行動を客観的に評価することができる						

学生とコンピテンシーを共有しよう

鳥取大学医学部保健学科

卒業時に到達すべき
コンピテンシー獲得の手引き



鳥取大学医学部保健学科看護学専攻
2019年3月作成

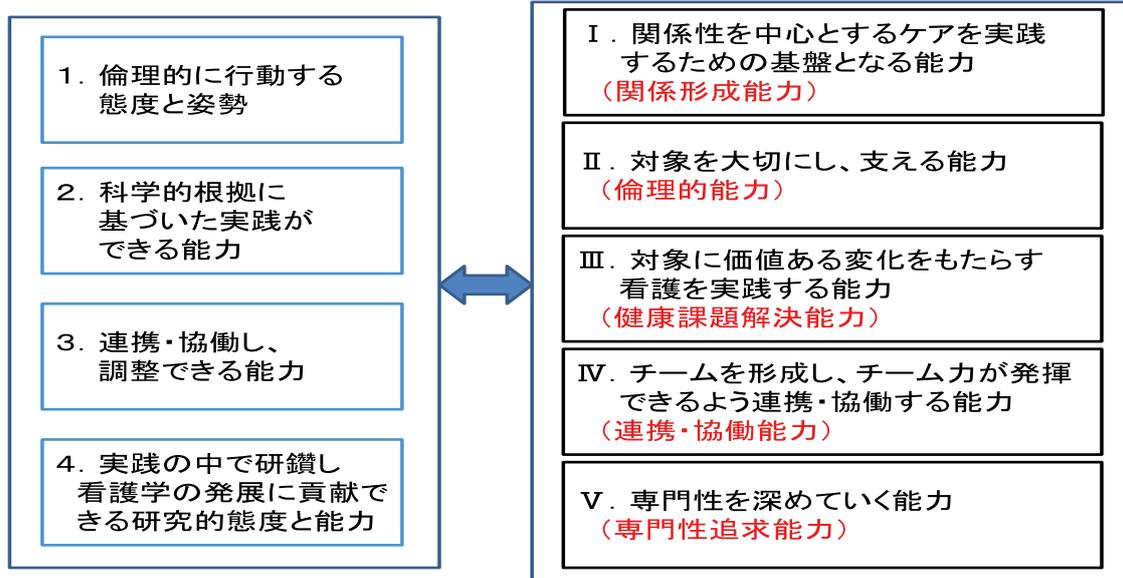
大学で何を学ぶか

- 専門的な知識・技術
- 学問として学ぶ
- 専門職者としての姿勢・態度・能力
自主性、積極性、責任感、社会人基礎力
観察力、判断力、分析力、倫理観、思いやり、
コミュニケーション能力、
読む、聴く、話す、書く、熟考する、などの学習する
能力(Meyers,1993)、その他もろもろ
- 社会人として通用する力
(社会人基礎力)
- ディプロマ・コンピテンシーを意識する

コンピテンシー

- 特定の状況のもとで自らの**認知的側面**（知識、**技能**）と**非認知的側面**（感情、態度、**価値観**、**動機づけ**）を適切に結集して、要求や課題に対応することができる**能力**のことをいい、**行動として反映**されることで意味をなす。

学位授与方針(ディプロマ) とコンピテンシー



場面1 こんな時どうする？

看護師さん、
明日からの治療嫌だわ、
代わってよ！

あなたは
看護師です



A田さん、
がんの患者さん
明日から、初めてのがん治療
が始まります

まずは、A田さんの言葉の 背景を考える

気持ちの表出、サイン

看護師さん、
明日からの治療嫌だわ、
代わってよ！



A田さんの心の中



点滴長いな、嫌だ
な。
本当に良くなるの
かな？



副作用が嫌だな
怖い、とにかく初めてでイ
メージがつかない……

看護師はA田さんに**関心**を持ち、A田さんの思いを**推論**する
“A田さんは色々なことが気になっているのではないか”

看護師の推論

初めての治療で不安なんだね。
逃げ出したいくらいの気持ちなん
だろう。
何が嫌なのかな？
はじめてのことで何が嫌なのか
自分でもわからないかも。

感情に焦点を当てて受けとめる
患者さんは今、どんな気持ちな
んだろう(患者さんの立場に立っ
て考えてみる)

共感・体験の共有

「治療が心配なのですね。初めてでわ
からないことがわからないですよね。
逃げ出したくなりますよね。」

苦しい気持ちの表出、サイン

看護師さん、
治療いやだわ、
かわってよ！

そうなんです！

自分の気持ちが分かって
もらえた時に思わず出て
しまう言葉 = 「そうなんです」

気持ちが落ち着く
満足、安心な気持ち
考えが整理される
意欲が湧く
信頼関係を感じる

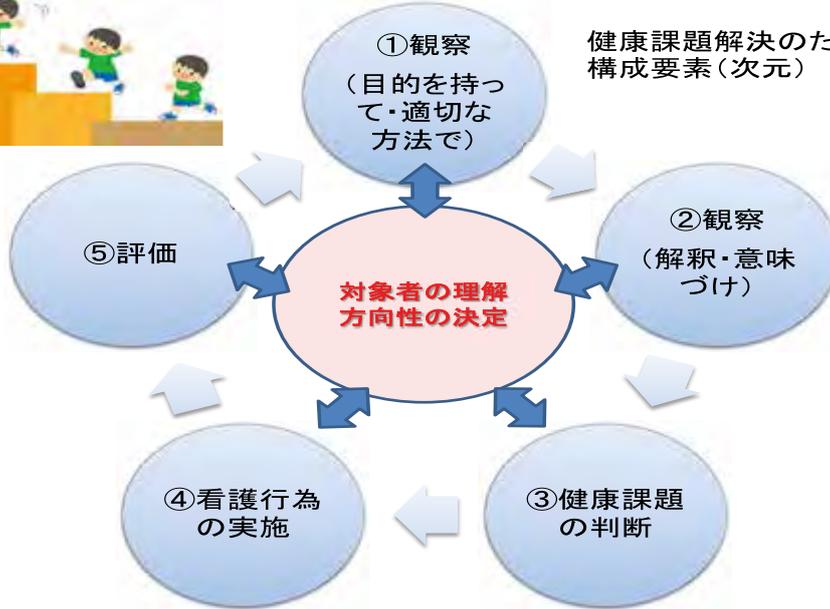
関係性形成能力

次元(構成要素)

- 人間関係の形成
- 援助的人間関係の形成
- 対象との関係における自己の客観的評価



健康課題解決能力



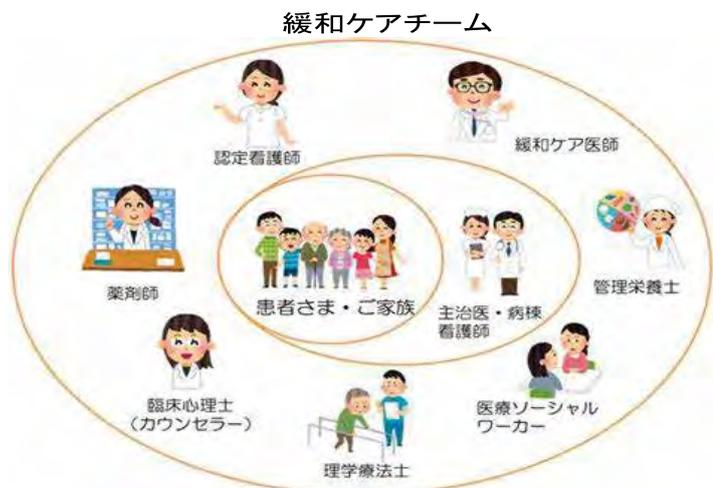
健康課題解決のために必要なプロセス、構成要素(次元)



連携・協働能力



- 協力関係の維持
チームにおける情報共有
チームの形成
- 対等な関係の構築
チームにおける相互理解
チームにおける役割認識



倫理的能力

- 個人としての品行方正
- 個人としての自己理解
- 心身の健康保持増進
- 守秘義務の遵守と個人情報保護
- 安全管理
- 知る権利および自己決定の権利の尊重と擁護
- 看護者としての責任の認識と倫理的行動(善行、誠実・忠誠、無害、自律尊重)の促進

これらの能力を高めていくためには

専門性追求能力

- 看護を体験から学ぶ力
- 自己を振り返る力
- 専門的知識の活用
- 看護観の醸成
- キャリア形成



学生のコンピテンシー獲得を支えたい

コンピテンシー自己評価

卒業時および卒業後に目指す看護職者としてのあるべき姿をイメージし、目指す姿に向かっているかどうか、**自己の成長過程を認識**することを目的に継続的・定期的に自己評価を実施する。

目的:

- 1) 自己を振り返り、自己を客観的に認識する機会をもつ
- 2) 自己を分析的に吟味しこれまで意識しなかった面に気づき、自己の課題を明らかにする
- 3) 自己の反省感や効力感を高める
- 4) 次の段階を目指すための新たな決意、意欲をもつ

学生のコンピテンシー獲得を支えたい

方法:

- 1) 年に1~2回の頻度で評価時期を決定する
- 2) 別紙ルブリックを用いて、現時点での自己の到達レベルを評価し、ルブリックに○をつける
- 3) 「評価の理由・課題」を言語化する
- 4) 自己評価を教員にサポートしてもらいたい場合は、その都度、講義担当教員、実習担当教員、ゼミ担当教員などに自ら依頼する

アポイントの取り方: 教員の研究室に訪室して日程調整を行う、ホームページ記載のメールアドレスを調べてメールで日程調整する、実習中や講義後に直接教員に依頼する、など

教員の役割: 評価時期に関するアドバイス、ルブリックの活用方法の教示、学生の振り返りの促進(具体的場面の想起、自己の傾向への気づき)、自己評価と教員による評価との相違がある場合、その要因の検討など

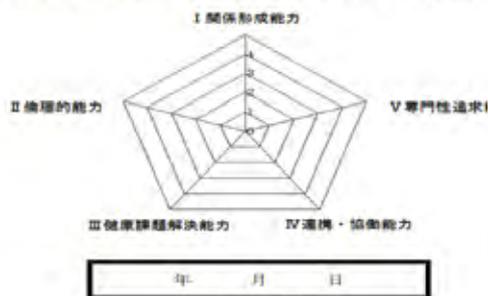
評価スケジュール表:具体的に評価の時期と目的を考えてみよう!

下記のグレーの箇所は年に2回の評価強化月間として推奨の時期であるが必須・強制ではなく、自分の進捗状況や課題に応じて、任意で評価時期を設定してもよい。評価回数も自分で設定する。また、状況に応じて臨機応変に追加・修正を行う。

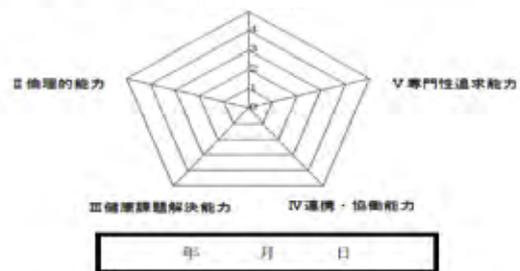
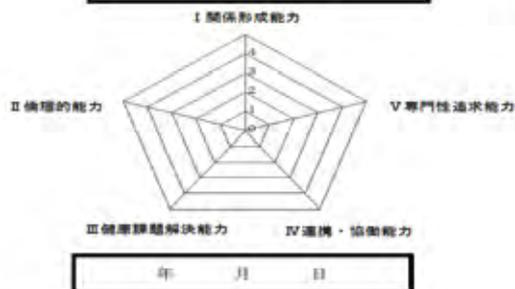
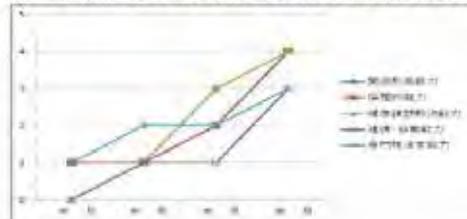
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
例)3年次						○実習開始前に、実習生の成長を知るため、成長すべき能力を整理するため。						
1年次												
2年次												
3年次												
4年次												

6. 自己分析をしてみよう! (自己へのフィードバック)

1) 現時点での自分の能力レベルについて、レーダーチャートであらわす(数値はレベル)。



2) 自分の能力レベルの変化を経時的グラフであらわす
例: 下記のように能力毎に色分けして推移をみるとわかりやすい



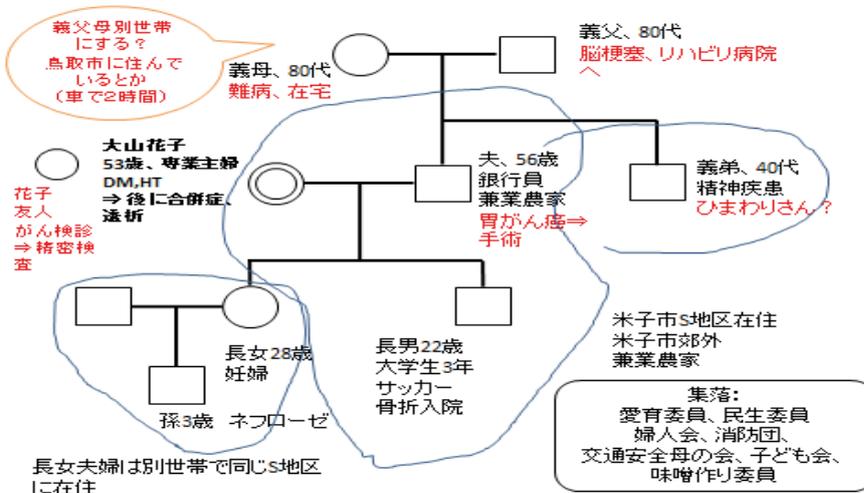
コンピテンシー自己評価試行

学生の意見

- ・自分たちが4年間でどのような能力を身につけないといけないか、イメージがついた
- ・コンピテンシーというものが何かわかった
- ・4年間コンピテンシーの獲得を意識していきたい
- ・目標が見えたので主体的に頑張りたい
- ・レベルの逆転があるのでは？
- ・言葉の違いがわかりにくい ex.「体験」と「出来事」
- ・「対象から見られている自分に気づく」とは「対象から見られていることに気づく」のか「どういうふうに見られているかに気づく」どちらの意味？

いざ！ カリキュラム

包括的ケア(いつでも、どこでも、だれにでも)を学ぶ
大山花子一家と取り巻く人々、地域



・健康課題
解決過程演習

・生活援助論
演習

・治療援助論
演習



いざ！ カリキュラム

実習：ひと・まちの健康を支え、暮らしを守る



健康課題解決過程実習

包括的支援統合実習

包括支援基盤実習：
ヘルスプロモーション

包括支援基盤実習：健康生活



4. (CQIの観点から) 取り組み内容の捉え直し

- ・継続的に私たち**個人のビジョン**を明確にし、それを深め、エネルギーを集中し、忍耐力を身につけ、現実を客観的に見る
- ・私たちが作り出そうとする**未来の共通像を共有**し、組織全体で深く共有できる目標や価値観や使命を見出す
- ・今どこにいて、どのように進めばよいのかを知る
- ・他の人たちと効果的に話し合い、相互に理解を深める
- ・一人一人が看護や教育について抱いている**前提を意識化**し、問いなおす
- ・他者と共に、探究し、考察し、内省することで、私たちの意識と能力を共同で高める

ピーター・ゼンゲ 学習する組織

5. まとめ CQI推進上の課題

- ・**時間**の使い方の柔軟性や生産性
- ・**コミットメント**の程度 ビジョンの共有や方略の共有
- ・不安や自信のなさ
- ・批判的な意見や態度
- ・**組織の成熟度** “関係の質”“思考の質”“行動の質”
- ・常に変化し続けることを受け入れる
忍耐力と寛容性

- ・様々な概念について言語化して共有する
- ・“方法”に飛びつかず、“ビジョン”を大切にする
- ・自己成長と組織の発展を楽しめる



多様な CQI をささえる大学間相互支援ネットワークの力

< グループワークの部 >

看護学教育研究共同利用拠点
令和元年度看護学教育ワークショップ

9. 全日程参加者グループ別名簿

1G(6名) ファシリテータ:野地有子 場所:けやき会館3F レセプションホール

国 公 私 別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設 年度	氏名
公	名古屋市立大学	看護学部看護学科	准教授	愛知県	1999	脇本 寛子
国	九州大学	医学部保健学科 看護学専攻	准教授	福岡県	2002	川田 紀美子
私	神戸女子大学	看護学部看護学科	教授	兵庫県	2015	東 ますみ
公	群馬県立県民健康科学大学	看護学部看護学科	教授	群馬県	2005	廣瀬 規代美
私	東京女子医科大学	看護学部看護学科	教授	東京都	1998	吉武 久美子
私	関西福祉大学	看護学部看護学科	准教授	兵庫県	2006	堀 理江

2G(5名) ファシリテータ:吉本照子 場所:けやき会館3F 小会議室

国 公 私 別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設 年度	氏名
私	自治医科大学	看護学部看護学科	教授	栃木県	2002	永井 優子
国	島根大学	医学部看護学科	准教授	島根県	1999	橋本 美幸
私	同志社女子大学	看護栄養学部	准教授	京都府	2015	光木 幸子
国	香川大学	医学部看護学科	教授	香川県	1996	森永 裕美子
私	愛知医科大学	看護学部看護学科	教授	愛知県	2000	高橋 佳子

3G(6名) ファシリテータ:錢淑君 場所:けやき会館3F 会議室4

国 公 私 別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設 年度	氏名
国	東京医科歯科大学	医学部保健衛生学科 看護学専攻	教授	東京都	1989	柏木 聖代
公	石川県立看護大学	看護学部看護学科	准教授	石川県	2000	木森 佳子
私	甲南女子大学	看護リハビリテーション学部看護学科	教授	兵庫県	2007	松岡 純子
私	東都大学	幕張ヒューマンケア学部看護学科	准教授	千葉県	2018	光樂 香織
私	広島文化学園大学	看護学部看護学科	准教授	広島県	1999	進藤 美樹
私	四国大学	看護学部看護学科	教授	徳島県	2009	小川 佳代

4G(6名) ファシリテータ:黒田久美子 場所:けやき会館2F 会議室3

国 公 私 別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設 年度	氏名
公	神奈川県立保健福祉大学	保健福祉学部看護学科	教授	神奈川県	2003	間瀬 由紀
国	徳島大学	医学部保健学科 看護学専攻	准教授	徳島県	2002	橋本 浩子
私	西九州大学	看護学部看護学科	准教授	佐賀県	2018	池田 佐知子
私	鳥取看護大学	看護学部看護学科	教授	鳥取県	2015	古都 昌子
国	富山大学	大学院医学系研究科看護学専攻	教授	富山県	1993	西谷 美幸
私	豊橋創造大学	保健医療学部看護学科	准教授	愛知県	2009	桂川 純子

5G(6名) ファシリテータ:斉藤しのぶ 場所:けやき会館2F 会議室2

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
私	帝京科学大学	医療科学部看護学科	准教授	東京都	2012	大釜 信政
私	久留米大学	医学部看護学科	教授	福岡県	1994	原 頼子
私	摂南大学	看護学部看護学科	准教授	大阪府	2012	眞野 祥子
国	信州大学	医学部保健学科 看護学専攻	講師	長野県	2003	芳賀 亜紀子
公	札幌市立大学	看護学部看護学科	教授	北海道	2006	喜多 歳子
国	山口大学	医学部保健学科 看護学専攻	准教授	山口県	2000	田戸 朝美

6G(6名) ファシリテータ:土肥美子 場所:けやき会館2F 会議室1

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
国	佐賀大学	医学部看護学科	准教授	佐賀県	1993	室屋 和子
国	群馬大学	大学院医学系研究科 保健学専攻	教授	群馬県	1997	金泉 志保美
私	中部大学	生命健康科学部保健看護学科	准教授	愛知県	2006	横手 直美
公	山梨県立大学	看護学部看護学科	教授	山梨県	1998	遠藤 みどり
公	三重県立看護大学	看護学部	教授	三重県	1997	宮崎 つた子
私	東京医療保健大学	千葉看護学部看護学科	准教授	千葉県	2018	田久保 由美子

7G(5名) ファシリテータ:飯野理恵 場所:アカデミックリンクセンター1F101・ひかり

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
国	旭川医科大学	医学部看護学科	准教授	北海道	1996	塩川 幸子
公	岐阜県立看護大学	看護学部看護学科	教授	岐阜県	2000	石川 かおり
私	国際医療福祉大学	保健医療学部看護学科	准教授	栃木県	2019	樋本 まゆみ
公	宮城大学	看護学部看護類	教授	宮城県	1997	木村 眞子
私	四国大学	看護学部看護学科	准教授	徳島県	2009	富澤 栄子

8G(6名) ファシリテータ:石橋みゆき 場所:アカデミックリンクセンター3F303・きわみ

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
私	日本赤十字豊田看護大学	看護学部	准教授	愛知県	2004	岡田 摩理
国	秋田大学	医学部保健学科 看護学専攻	講師	秋田県	2001	成田 好美
私	東京医療保健大学	医療保健学部看護学科	教授	東京都	2015	阿部 桃子
国	浜松医科大学	医学部看護学科	准教授	静岡県	1995	影山 葉子
私	目白大学	看護学部看護学科	教授	埼玉県	2006	武田 保江
公	高知県立大学	看護学部看護学科	教授	高知県	1952	瓜生 浩子

10. 看護学教育 CQI モデル Ver.1 を用いたワークの進め方

I. 看護学教育 CQI モデル開発の目的

本モデルは、各看護系大学の教員が、自律的な CQI に取り組むことを促進するために開発した。

図 1. 看護系大学教員の自己の立ち位置を説明する構造図

図 2. CQI に向かう看護系大学教員の思考の方向性をあらわす図

開発中 看護系大学教員の CQI の戦略活動を説明する図

II. 看護学教育 CQI モデル Ver.1 の活用方法

図 1 は、多面的な自大学の現状分析に役立つ。図 2 は、現状分析の結果に至る『プロセス』の振り返りを促すことによって、より深い現状分析、自大学のありたい姿や必要な CQI について思考を深めることに役立つ。

III. スケジュール

<第 1 日目 10 月 28 日 (月) >

13:30~14:00 オリエンテーション、グループの部屋へ移動

14:00~16:50 1 大学ずつの事例で【ワーク 1】をすすめる

事前に記載された<ワークシート A>にもとづき、<ワークシート B>と<ワークシート C>を使ったワークをセットにしてすすめる (170 分)

適宜、休憩しながらすすめる

(17:00~交流会 けやき会館内コルザ)

<第 2 日目 10 月 29 日 (火) >

9:30~12:00 公開座談会

CQI 実践者 4 名からの話題提供とディスカッション

希望された内容の座談会に各自が参加する

12:00~13:00 昼食・休憩 (60 分)

13:00~14:30 【ワーク 2】 (90 分)

ワーク 1 のグループに戻り、ワークシート D を各自が記載し、メンバーへの計画宣言とコメントのフィードバック

14:50~15:40 全体討議・まとめ (60 分)

全日参加者の CQI の課題を俯瞰して、全国の看護系大学で必要な CQI の様相と期待される成果 (地域で人々の Life (生命・生活・人生) を支える看護職を輩出する) に向けた課題等を検討する。

15:40~16:00 閉講式

IV. ワークの成果

各自がワークで経験し、気づき考えたことがワークの成果となる。ワークシートの提出や全グループの発表はなく、全体討議での活発な意見交換を通して、経験の共有と深まりを期待する。

V. ワーク内容

【ワーク 1】

ワークシート B とワークシート C を使って、一大学ずつの語りとそれに対するフィードバックを行います。

ワークシート B・C を使ったワークの留意ポイント!

- ・このワークでは、図 2 の①と②のプロセス、③のありたい姿を考えることにあたります。
- ・「ストーリー」=「物語」は、単独の言葉だけではあらわせない事態のつながりを表現してくれるものです。時間の経過の中で出来事を説明したり、さまざまな登場人物のお互いの位置関係を示し、空間的広がりの中なかで事態を理解することが可能となります。

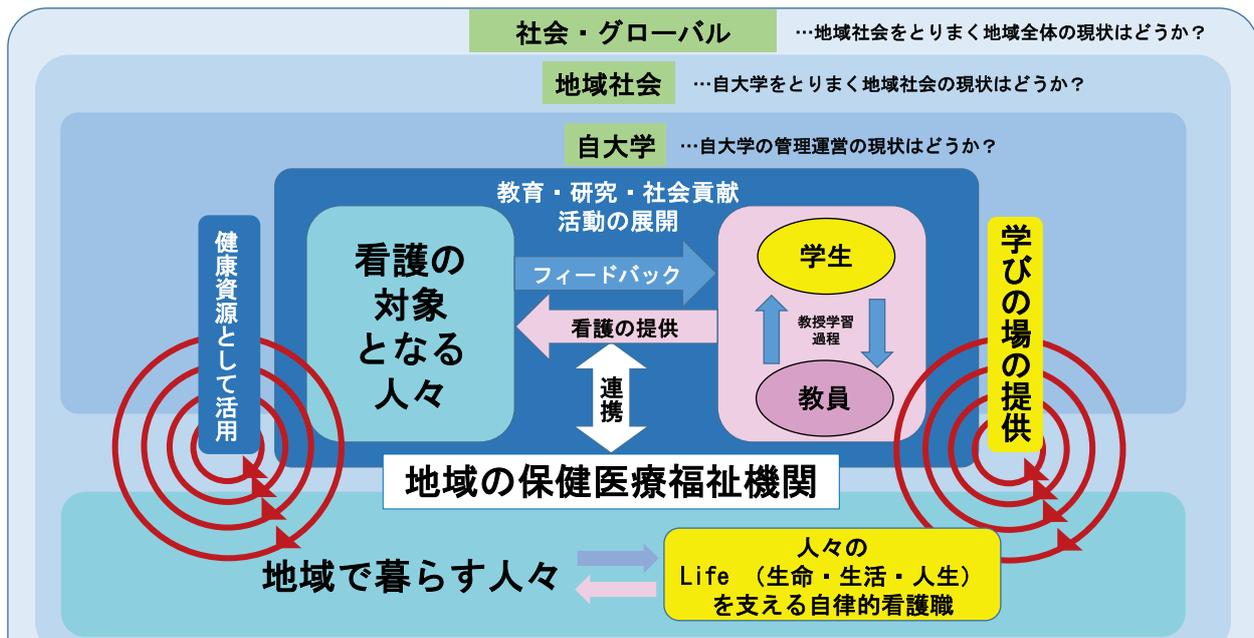
- ワークシート B、C は、一つずつ欄の記述をすすめるのではなく、その都度、必要な内容を書き留めておくノートやメモとして自由に使ってください。自大学の語りの時だけでなく、随時、気づきを追記して行ってください。
- このワークのポイントは『相互支援』です。異なる背景の大学間、大学内の立場も異なるメンバー間の相違から、相互に学び、相互支援することがねらいです。
- 質問や意見の伝え方、時間の均等な使い方、プライバシーの保護や守秘義務に配慮してワークをすすめてください。

【ワーク 2】

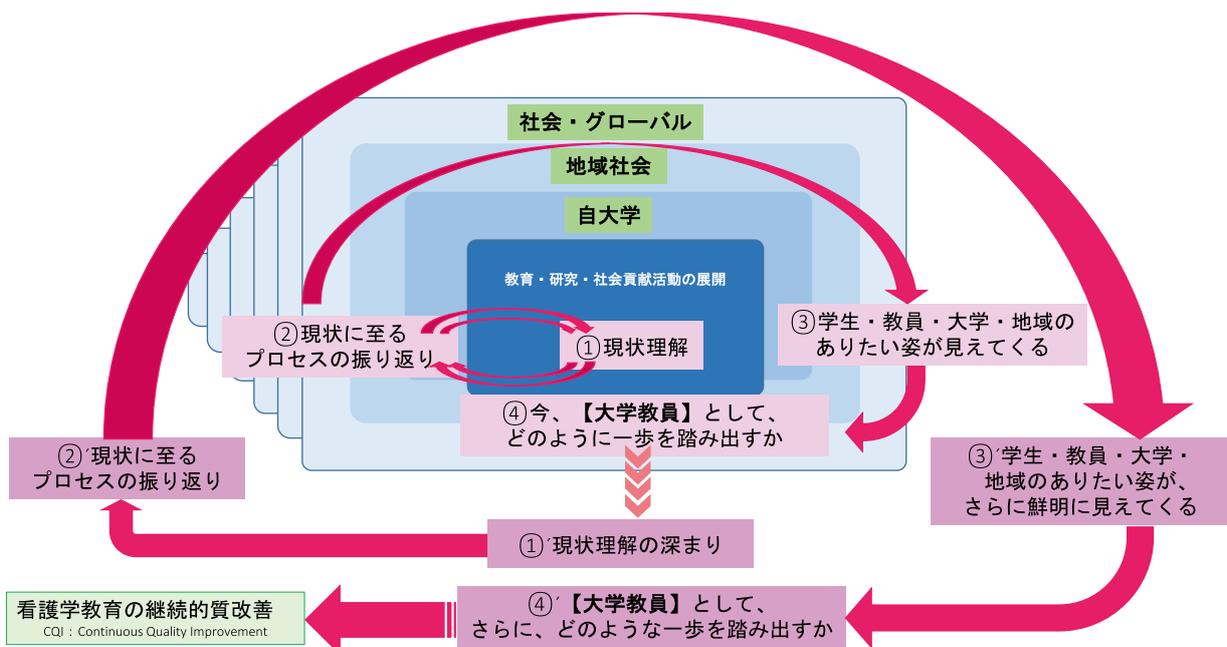
- ① ワークシート D を使って、自大学で CQI を推進する上で必要なこと・課題について各自が記載し、グループメンバーに計画を宣言する。それに対して、グループメンバーはコメントをフィードバックする。

VI. ファシリテーターの役割

ファシリテーターは、主に、時間管理、すすめ方に困った際の相談役となり、グループを支援する。



看護学教育CQIモデルVer.1 図1：看護系大学教員としての自己の立ち位置を見極めるための構造図



看護学教育CQIモデルVer.1 図2：看護学教育の継続的質改善に向かう思考の方向性をあらわす図

11. ワークシート (A ~ D)

A

看護学教育の継続的質改善 (Continuous Quality Improvement :CQI) のためのワークシート

所属大学名 _____ 職位 _____ 氏名 _____

ワークシート A : 自大学・地域・社会全体の現状を俯瞰する

- 1) 自大学の現状について、現在気になっていることを以下の視点から振り返り、自由にメモしてみましょう。
- 視点1 : 学生の現状はどうか?
 - 視点2 : 教員の現状はどうか?
 - 視点3 : 教育・研究・社会貢献活動の現状はどうか?
 - 視点4 : 自大学の管理・運営の現状はどうか?
 - 視点5 : 自大学をとりまく地域社会の現状はどうか?
 - 視点6 : 地域社会をとりまく社会全体 (含グローバル) の現状はどうか?

2) 図1を見ながら、1) でメモした気になっていることは、図1のどこに位置するのかを考え、図中に○印をつけてみましょう。

3) ご自身が気になっていることに関連のありそうな事実を、できるだけ多面的に集めてみましょう。

関連のありそうな事実 (メモ)	記入例
【自大学の沿革、設立の理念】	<ul style="list-style-type: none"> ・設置主体は学校法人 (私立大学) ・地元代々の医師一族が、地域の人々の医療を支える人材を輩出することを理念とし、地域の期待もあり開学した
【学生の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・なんとか定員充足しているが、合格者の学力格差が大きい ・授業についていけない学生がおり、個別学修支援ニーズが多い ・全員を国家試験に合格させるのが大変な状況
【教員の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・地方の新設看護大学なので教員がなかなか集まらず、教員確保に難渋している ・年齢も経験もさまざま
【教育・研究・社会貢献活動の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・学部教育だけで手いっぱいであり、研究・社会貢献活動まで手がまわらない ・大学院開設は開学時には想定していたが、懸案のまま保留となっている
【自大学の管理・運営の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・医師である理事長のトップダウンで物事が決まる
【自大学をとりまく地域社会の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・基幹産業は農業で、人口流出が激しい ・大学には地域創生を期待されている ・附属病院はないが、地域の医療施設とは良好な関係にある
【地域社会をとりまく社会全体 (含グローバル) の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・社会保障費の増大が国家予算を圧迫 ・地域包括ケアシステムの構築が進んでいる ・病床機能分化が進んでいる ・大学進学率の上昇

4) ご自身が気になっていることと、それをとりまく自大学・地域・社会全体は、どのようにつながりあっているのでしょうか? その関連性を記述してみてください。(メモや箇条書きでよいです)

ワークシート B：自身の気になっていることとそれをとりまく自大学・地域・社会全体の関係性をストーリーとして語る

1) 図2の①、②のように、現状とその現状に至るプロセスを振り返りながら、自身の気になっていることとそれをとりまく自大学・地域・社会全体の関係性をストーリーとしてグループメンバーに説明してみてください。必要なら、以下に、説明用のメモを作りましょう。

2) グループメンバーから受けたフィードバックの内容を以下に記述してみましょう。

3) 新たに気づいたことがあれば、以下にメモをしてください。

ワークシートC：学生・教員・自大学・地域のありたい姿の実現に向け、第一歩を踏み出す

1) これまでのプロセスを経て見えてきた③学生・教員・自大学・地域のありたい姿を、ご自身の言葉で記述してみてください。

☆思考のヒント☆ 個人レベル、専門領域レベル、学部・学科レベル、大学レベルなど、どのレベルで考え始めてもよい

☆思考のヒント☆

- 図1の登場人物の各々について、ありたい姿を考えてみる（ありたい姿は、自分本位や、机上の理想論ではなく、現実に即し未来に向かう姿として考えてみる）
- 以下のような問いかけで、図1の登場人物の各々についてありたい姿を考え、短いフレーズや単語で表現してみる
 - 例) 「人々のLifeを支える自律的看護職」、「地域で暮らす人々」とはどのような人か
 - 例) そのためにはどのような「学びの場」があったらよいか、どのような「学生」であったらよいか、どのような「教員」だったらよいか
 - 例) 「地域の保健医療福祉機関」のありたい姿とは
 - 例) 学生が実習で看護を提供する「看護の対象となる人々」とはどのような人であったらよいか

2) 見えてきたありたい姿に向かって、今、何ができそうか、何をしてみたいか、なるべく具体的にアイデアを出してしてみましょう。

☆思考のヒント☆ 協力者を具体的にイメージしてみる 脅威はチャンスにならないか？ 弱みは強みにならないか？

看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement :CQI）のためのワークシート

D

所属大学名

職位

氏名

ワークシート D：自大学で CQI を推進する上で必要なこと・課題

- 1) 見えてきたあたり姿に向かい、CQI をすすめる上で、自大学で必要になること・課題はありますか？
- 2) その解決に向けて、どのような戦略をとったらいでしょうか。グループでディスカッションをしてみましょう。

1 2 . 公開座談会

本年度のワークショップでは、CQI の実践者から学ぶ、大学間相互支援をねらいとして、公開座談会を企画した。職位や課題の多様なグループメンバー同士の相互支援ですすめるグループワークと異なり、公開座談会では CQI の課題から4つのグループに分け、より具体的な CQI の推進に向けた意見交換ができるように企画した。事前にテーマを提示して希望を取り、当日は実践センターの担当者が司会者となり、進行した。

各々の公開座談会について、以下に報告する。

A. テーマ：若手教員・中堅教員から発信するボトムアップ型 CQI のアイデアの構想

1) 話題提供者：山形県立保健医療大学 講師 山田香先生 (担当センター教員 銭)

2) 話題提供の概要

昨年度本センターが開催したワークショップ「自大学の強みや使命を活かす CQI」に参加し、配置されたグループワークでの“愚痴大会”は切掛けであった。他の参加者の発言を聞きながら、それを自大学の現状・気になることと照らし合わせると、徐々に問題点・課題が見えるようになり、自分の大学について再発見できた。

自大学に戻った後、ワークショップで得たもの「全体のなかでとらえると何がどう問題なのか」、「自大学は地域でどれだけ大事にされているか」等を報告したが、反応が薄かった。しかし、あきらめずになんとか FD と繋げて進めていきたいと思った。

地方大学の職員は 2～3 年ごとに転勤することで大学へのコミットメントが低い現状がある。数か月後、学内の FD・SD として、チームビルディングのワークショップ企画を持ち込むチャンスがあった。ワークショップの講師はレゴ社に依頼し、LEGO®SERIOUS PLAY®の手法で行った。外部講師に委託する場合、1 日 100 万円の謝礼を払うこととなるが、大学内にて組織の決定権を持つ上級管理者の参加であれば、経費を抑えることができるため、ワークショップには若手の教員だけではなく、学長及び理事も参加することになった。学長・理事の参加により、通常の FD よりも参加人数は増加した。活動内容としては、参加者がブロックを使用し、自部署及び理想な卒業生像について表現を行い、共有することであった。実際に目に見える形にすることで、皆が同じ方向性に向いている確信が得られた。今回の活動の経験を通して、FD は上級管理者の仕事ではなく、若手の自分も出来るという認識が変わっていった。その後若手及び中堅教員による自主勉強会を行った。大学の卒業生の 6 割が地元で働いているので、ホームカミングデーを設け、10 年後の大学の変化を自身に関わるものとして捉えさせ、共にカリキュラム改革していく意識での参加を可能にした。具体的な活動として、山形の名物芋煮、こんにやくを作りながら、本センターのワークショップで用いたシート A～C を活用して進められた。またその成果として、参加者全員に「気高い心もち、様々なことにチャレンジし、ワークライフバランスを大事にしながら、ネ

ネットワークを広げ、山形の文化を基盤にした本学の良さを世界に発信していくこと」という共通認識を持たせることに繋がられた。

3) CQI の推進に向けた意見交換

参加者からの意見として、「中間層の力を引き出すには各分野の上の教員の関係性が良いことが要素である」、「山形の名物としての芋煮、こんにゃくを利用しているホームカミングデーという活動の成功した理由は、教職員・卒業生が地元で美味しいものへの共通のコミットメントがあることと、学生はそれぞれの家庭で愛情いっぱい育てられ、教員に対するマイナスの感情を殆ど持っていないからだと考えられる」、「話題提供者の山田講師の言ったように“今やっておかないと10年後よい未来が現れない」、「FDの参加者を増やすには早めの日程設定、事務担当を巻き込んでいくことが大事である」、「私学で多数の学科があり、共通のカリキュラム改革を行わないと成果を得ることが難しい」等が挙げられた。各自で自らの大学の現状を思い浮かべながら、これから向かう課題について、盛んに討論が行われた。

B. テーマ：学生の学びの評価に関する CQI

1) 話題提供者：大阪医科大学 准教授 土肥美子先生（担当センター教員 野地）

2) 話題提供の概要

学生の学びの評価に関する CQI（看護学教育の持続的質改善）をテーマに、話題提供者の土肥美子先生から、大阪医科大学における活動事例が時系列を追って具体的に紹介された。

3) CQI の推進に向けた意見交換

参加者は19名であり、その内訳は国立6大学、公立4大学、私立9大学であった。土肥先生を囲み円陣を組んで膝をつき合わせる中で、熱心な意見交換がなされた。学生の学びの評価には時期や方法の工夫が必要であり、各大学の特徴に合わせた方法の開発や試行錯誤が必要であるが、本座談会にみられるような、他大学における活動事例を踏まえた意見交換により、成功例だけでなく失敗例も含んだ情報交換の有用性の意見が多くみられた。

C. テーマ：全領域で運営する地域包括ケア実習に向けた CQI

1) 話題提供者：鳥取大学 教授 深田美香先生（担当センター教員 黒田）

2) 話題提供の概要

話題提供の前に、参加者の座談会への期待を確認したところ、以下の内容が挙げられた。

- ・教員の負担や実習先の開発をどうしたらよいか
- ・学生にどのように地域包括ケアの全体像を学んでもらえばよいか

- ・在宅や地域看護領域以外の先生をどのように巻き込んだらよいか
- ・領域ごとに温度差があるなか、どのように合意形成するか
- ・急性期病院の実践と地域をどのように関連させていくか

地域包括ケア実習に向けた CQI の実践やベースとなる考え方についての話題提供では、以下のエッセンスをお話し頂き、質疑応答につながった。

- ・学生には、『地域』がその人の暮らしの場だということを一番伝えたい。
- ・生活する人の視点、ケアシステムの視点の両方をバランスよく考えてもらいたい。
- ・出来るところから取り組む：母性小児看護学実習の 1 週間分を使い、学年全員が地域に出かける実習をはじめた。教員全員ではないが、可能な限り、他の領域の教員も担当する。
- ・やってみて教員も、病院や施設だけでなく、地域に出かけると学生の視野の広がり等を実感すると他でもやれるんじゃないかと思えるようになり、次のカリキュラムでは成人や老人でもやってみる構想となっている。各領域の実習の中で地域包括ケア実習を組み込んでいく。
- ・それぞれの領域の専門性を大切にしつつ、5つのコンピテンシーの考え方を共有している。学生はローテーションして各領域をまわる。前半、中盤、後半でコンピテンシーの到達度を考えていく。最終的に 4 年生になった時に、能力を獲得して、統合実習に入るというのを全領域で統一してベースとしてやっている。
- ・他の領域の実習を担当する時に、専門領域と同じことはできない。私は何ができるか、専門領域の先生が何をして、自分が取れる役割に何かと打ち合わせをする。
- ・全領域で取り組むのは方法論なので、全領域で取り組むことが学生にとってよいのであれば、そうすればよいと考えている。

3) CQI の推進に向けた意見交換

<教員の負担や抵抗感>

慣れない場や領域に実習に行く教員の負担や抵抗感については、強制にならない、オープンに助け合う、意欲のある教員に任せる、その教員の役割を代わりに担う、行きたい教員がいなければ自分が出られるような体制を整える、負担というよりも視野が広がる、未経験の領域を経験する姿勢、学生がどう学ぶかを重視する、臨地の指導者との役割分担で教員役割を何にするかによる、どのような準備があれば抵抗感が減るのか、教員が実習に行かなくても、学生が多様な地域施設に行った経験を共有することでハードルが下がる等の意見が出された。

<地域包括ケアの概念の共有>

国が提示しているのは「地域包括ケアシステム」であり、「地域包括ケア」という言葉が一人歩きしていて、同じイメージで話をしていないのではないか、関係者間で概念を共有する場が必要だと意見交換された。

<地域包括ケア実習に向けた検討について>

話題提供者からは、半分インフォーマルで楽しそうに数名でやって報告させてもらったところ、楽しそうにやっているのを見て、他の教員ものってくるようになりフォーマルにした、今も定期開催で、集まれる人が集まり、その都度、必要な人に参加を依頼したり、サブの会などがつくられ、解決したら解散する方法が報告された。それに対して、やりたい教員が率先してやるような組織風土がどのようにつくられたかと質問があり、講座を越えていろいろな教員が協力しあう取り組みがあること、ランチを一緒に取る等のインフォーマルな形での関係作りを意識的にしていることが報告された。

<地域包括ケアを学ぶ実習科目の実践報告>

地域包括ケアを学ぶ実習科目の実践がいくつか紹介された。そこでは、学生が主体的に学ぶ工夫、土日に日程が設定された際の学生・教員の調整の工夫、負担の程度、実習費用の問題等の課題があげられ、意見交換された。また、地域の人の協力への思いがあり、意向、ニーズ、意見を入れながら運営をすすめており、学生の学びだけではなく地域の方々のメリットを考えていかないと実習が長続きできず、その地域にあった実習が展開されると受け入れてもらえると報告された。

なお、新たな実習科目を作る場合の条件等については、例えば地域の老人クラブを実習先にした場合、指導者には、教員と老人クラブの人の名前を併記する、教員が責任をもって指導しますと書いて全てクリアしている等の実践例が報告された。

<新しいカリキュラム導入への必要なFDは>

話題提供者からは、教授方法とか教育力はFDによってすぐ身につくものではないので、日々困ったことをお互いに相談したり、日々の困ったこと、経験を教員同士話したりすることが多い。経験の若い教員は、教育力を高めるFDを期待しているかもしれないが、フォーマルな形で会議の議題にしていないと報告された。

経験のある教員と学生のカンファレンスに同席することもFDになるし、同じ言葉・定義を共有する場というのも一つのFDになる、新しいことを始める時は、教員が学ぶチャンスでもあると意見が出された。

D. テーマ：新設大学でのカリキュラムポリシーの共有に向けたCQI

1) 話題提供者：福岡看護大学 学長 窪田恵子先生（担当センター教員 和住）

2) 話題提供の概要

福岡看護大学は、福岡県内で13校目の看護系大学として、2017年4月に開学した新設の看護大学である。現時点で、3年生までの3学年が揃い、学んでいる。話題提供者の窪田学長は、大学設置準備室室長として、開学前から設置準備にかかわり、開学後は、学長として、教員組織を率いている。今回は、「新設大学でのカリキュラムポリシーの共有に向けたCQI」と題して、新設大学のトップリーダーの立場から話題提供していただいた。話題提供の概要は以下のとおりである。

1. 福岡看護大学設立の背景・設置の趣旨（組織構造の概要）

福岡歯科大学を中心とする保健・医療・福祉の総合学園が、高齢社会における包括的な健康支援活動のパートナーとなり得る看護専門職を養成する看護大学を設置した。

2. 福岡看護大学の教育理念

看護の対象者が「その人らしく」暮らせるよう、これからの健康社会づくりに向けて“在宅看護”や“口腔から全身への健康支援”を学び、チーム医療で活躍できる看護実践能力を身につける。

3. DP「口腔から全身への健康支援ができる実践能力の育成」の実現を目指して（大学設置構想の段階から現在）

大学設置構想の段階から問題となったのは、以下の3点であった。

- ①着任予定の教員に口腔ケアに関する教育・研究実績がない。
- ②口腔ケアに関する教育の質の担保をどうするか。
- ③看護教員だけでは実現不可能。

そこで、大学設置構想の段階から現在に至るまで、以下のような取り組みを続けてきた。

実践Ⅰ. 看護大学設置準備室に教育・研究を牽引する委員会を設置

・開学1年前から、看護学・口腔医学連携研究委員会を設立し、系列の歯科大学や、短大の歯科衛生学科から、医師・歯科医師・歯科衛生士と連携できる体制をととのえた。

実践Ⅱ. 研究資金の獲得にむけて推進

・文部科学省科学研究費補助金の獲得を推進（15件の採択課題のうち、口腔関連のテーマが9件を占める）

- ・福岡看護大学共同研究費設立
- ・科研費獲得に向けたFD研修会の開催

実践Ⅲ. 口腔ケアに関する教育の質の担保

・FD委員会活動として、「口腔を起点とした全身の健康支援」に関連する授業科目の授業設計について共有する。

・FD委員会活動として、DPを踏まえた講義・演習・実習の連動性と実習計画の検討を行う。

・「口腔と全身の関連性を理解し、口腔の機能（摂食、咀嚼、嚥下、消化、吸収、構音、味覚など）のアセスメントと全身の健康管理に向けたコーディネートの方法および対象者に応じた援助技術の修得を目的に、入職時オリエンテーションや実習前教員向け説明会を実施する。

・看護大学医療短期大学合同学習会を開催し、口腔ケアや口腔機能の評価の演習を行う。

実践Ⅳ. 福岡学園三大学連携活動の推進

・私立大学研究ブランディング事業への参画

4. 今後の課題

- ・学習成果の把握・可視化
- ・卒業時の到達度評価

3) CQI の推進に向けた意見交換

〈FD 活動を活性化するには〉

参加者からは、「自大学では、FD 活動への熱意に教員間で温度差があり、ほとんど無関心な教員もいる。委員だけが頑張っているようなところがあり、疲弊している。FD 活動を組織的に盛り上げるにはどのような工夫があるか。」との質問が出され、意見交換を行った。意見交換で確認できたことは、以下のような内容であった。

- ・担当者が嫌々ながらやっていると、盛り上がらない。担当者の「学生のために」という熱意が組織を動かす。
- ・それぞれの教員の力を信じ、その力を「学生のために」発揮していただきたい、という心で取り組む。
- ・教員間の意見の相異は、「学生のために」という目標を掲げて調整する。
- ・今、在籍している“学生の声”を根拠に、教育改善に取り組む。

〈臨地実習施設との連携〉

話題提供者の大学は、福岡県内で 13 校目の看護系大学として、2017 年 4 月に開学した新設の看護大学であり、臨地実習施設の確保はどのようにしているのか、との質問が参加者から相次いだ。そこで、臨地実習施設との連携に関する意見交換を行った。意見交換で確認できたことは、以下のような内容であった。

- ・臨地実習施設側がどのようなニーズを持っているのかをきちんと把握することが大切。
- ・地域の中小病院やケア施設では、口腔ケアに関する悩みを抱えているところが多い。教員が「口腔と全身の関連性を理解し、口腔の機能（摂食、咀嚼、嚥下、消化、吸収、構音、味覚など）のアセスメントと全身の健康管理に向けたコーディネートの方法および対象者に応じた援助技術を修得」していると、臨地実習施設から頼りにされることが多く、実習施設との連携に役立った。
- ・看護学生も、口腔機能アセスメントができるので、臨地実習施設から役立つと言われる。
- ・看護学生が臨地実習で使うアセスメントシートも、臨地実習施設から好評である。
- ・臨地実習中に発生したインシデントやアクシデントへの対応は、大学の信用を左右するものだと位置づけ、組織として責任をもって取り組む。

〈研究活動の推進〉

参加者からは、「新設大学で、15 件も科研費が採択されているのはすごい、しかも、そのうち 9 件が、大学の理念である口腔関連のテーマであることが素晴らしい、このような研究活動が活発に行われている秘訣は何か」との質問が出され、意見交換を行った。意見交換で確認できたことは、以下のような内容であった。

- ・「私立大学研究ブランディング事業」に参画したことで、成果を出さなければならない、報告会をしなければならない、という強制力が働いたことがよかった。
- ・地域包括ケア時代における口腔ケアの重要性をはっきりと打ち出し、研究の意義や必要性を共有できたことがよかった。
- ・学園全体の取り組みの中で、看護大学の学長が、「看護は何をしているのか」が医師や歯科衛生士に伝わるような発信を常にし続けていることがよかった。

以上のような意見交換を通して、新設大学でのカリキュラムポリシーの共有に向けたCQIにおいては、大学の理念を具現化し社会に貢献しようとするトップリーダーの明確なビジョンとそれに導かれた細やかな行動が、学生・教員・臨地実習施設の潜在力を引きだし、成果を上げることができる、と確認できた。

13. 全体討議・まとめ

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長
和住 淑子

グループワークの部では、参加者が8つのグループに分かれ、CQI モデル Ver.1 とワークシートを用いて、自大学をとらえなおし、それを紹介し合うワークを行った。グループワーク後、それぞれの参加者が自大学をどのようにとらえなおし、CQI のエネルギーを得たのかについて、参加者相互で共有し、多様な CQI のあり方を俯瞰するため、全体討議・まとめを行った。全体討議・まとめで共有された主な内容は以下のとおりである。

○今回の看護学教育ワークショップのように、分野、大学を超えて教員間で、自分の大学のことをストーリーとして語る機会は普段ほとんどないため、貴重な経験だった。世代交代が進む中、普段当たり前に思っていることを、言語化し、相手に語り、表現するプロセスが大切で、そうすることで全体を俯瞰でき、課題が鮮明になったことが、大きな成果である。課題が鮮明になることで、問題に表層的に取り組むのではなく、例えば、地域性を含めた視点で、ひとつの取り組みを他につなげられるのではないか、というアイデアが生まれ、自身の考えが変化したところがあった。

○仲が悪いわけではないが、専門領域の間に壁があり、教員間の横のつながりが希薄である、という課題が見えてきた。横のつながりを強化するためには、まずはFDの時間を使って学科の活動紹介をしてみるとか、講義資料を相互に閲覧できるようにするなど、了解を取ればすぐにでもできる工夫がわかった。また、組織全体が見えないまま、一人で活動すると、多忙で疲れてしまったり、人をねたんだり恨んだりしてしまいがちであるが、組織全体が見えるようになると、個々の教員の活動が地域貢献につながる大学のパワーなのだ、と思えた。

○自大学の強みというものを、ここで初めて分かった気がする。強みがわかると、初めの一歩が踏み出せると思った。自大学では、保健師国家試験の合格率が悪いというのが課題になっていたが、保健師が活躍する地域社会の現状に目を転じてみると、元気な高齢者が多く、伝統産業の非常に多い歴史の長い地域である。大学の国際化で、外国人を受け入れる機会も多いが、海外の人は伝統産業や伝統工芸品に触れるとほっとする、という話も聞いたりして、これも大学の置かれた地域の一つの魅力だろうと思った。これを踏まえて、学生、卒業生の活躍する姿を思い描くと、やはり地域で暮らしている人が伝統というものに価値を置いている、それを知っている、その上で看護している学生であってほしい、と思えた。この気づきを自大学に持ち帰り、まずこれを伝えることが変革の第一歩なので、

大事にしたいと考えている。教員同士でもう一度、教職員で望ましい卒業生像を話し合っ
て、それから自大学の特徴とか地域色の理解とか魅力発掘っていうのは何なのかというこ
とを考えていきたいと思う。最終的な大学の評価は社会がするものなので、そこを常に意
識した大学づくりを皆で共有しながら進めていきたいと思う。

○学生に課題を出すタイミングについて、学生から「先生たちの間での連携はどうなっ
ているのですか」「そういうところは先生たちの中で情報交換をしないのでしょうか」と、ズ
バツと聞かれることがあり、学生はよくわかっていると思った。領域間の連携のところ
で悩む教員が多くいたが、それを打破する力として、学生を信じるのが大切ではないか、
という結論に達した。地域に競合する看護大学が増え、入学者確保が大変な時世ではある
が、看護系大学として、人々の健康を支える使命をきちんと果たしていくという視点を外
さないようにすることで、おのおのの大学が、その地域で人々の健康を支えるような形を
つくっていけると思う。大学として、置かれた地域の健康を高めていく拠点となり、そこ
に貢献できる看護師を輩出する使命を忘れないでいきたい。

○ディプロマポリシーの評価が、まだうまく整備されていない、という課題に気づくこと
ができた。教員間の連携については、ミニFDを頻繁に行っており、そこで若い先生たちが
自由に意見を言える、楽しい場になっている、という他大学の取り組みの紹介があった。
自分の大学の一番の強みを生かした具体的なプログラムを、もう少し掘り下げて考え、そ
れを学生にきちんと提示できるようにしていきたい。

○「地域包括ケア論」という、1年生から4年生までグラデーションで学びを深めていく科
目を教員グループで新たに立ち上げた。いろいろ悩みながら、授業内容を決め、目指すゴ
ールも共有しながら、話し合ってきた。今、ちょうど1年生の科目が終わったところで、
来年はどうするか、など、内容面に話し合いが終始していたことに気づいた。やはり、今、
地域包括ケアシステムの実現ができる看護職が求められている、という背景があり、大学
としてどこに力を入れて看護師を育成していきたいのか、というところから話し合う必要
性を感じた。また、教員の世代交代を控えているので、このような領域横断的な授業をど
のような思いで皆が作ってきたのか、というプロセスも、紙面に残し、伝えていかなくて
はならない、と思った。自大学に戻ったら、早速、そのようなものを作りたいと思う。

○現代は、先輩たちのモデルが通用しない「モデルなきケアの時代」といえる。そのよう
な中で、看護基礎教育をやらなくてはいけない。したがって、形式的な「こうあるべき」
という議論は、もう絶対やめようって思っている。どれだけ先が読めるのか、また、こう
いう時代だからこそ大事にするべきものは何なのか、教員も学生もそれを探求する時代に
変わったと思っている。その中で、プロセスの可視化や仕組みづくりは、より一層求めら

よくなると思うし、大学の中だけではなく、大学が置かれている社会にどれだけ目が向けられるのが、本当に問われる時代になったと思う。私たち教員は、領域にどうしても縛られがちなので、地域に生きる一当事者として、自分がもしケアを受けるならばどのようなケアを期待するのか、そういうところに立ち戻って、全体を俯瞰しながら、物事を見ていく必要があると思う。いろんな人とつながる意味は、そこにあると思う。

○今回のワークショップに准教授の先生が参加しており、本当によく頑張っておられることがよくわかった。自大学の准教授の先生方を思い浮かべながら、組織の上に立つものとして、そのような准教授の先生方を支援していきたい、そういう自分でありたいと、強く思った。

地域包括ケアシステムの構築が進む中、病床の機能分化も進み、看護の対象者の多くは、病院の病棟ではなく、外来、地域のケア施設などの非医療機関、自宅に存在するようになった。このような社会の変化に即して、看護職の新たな役割発揮が求められている。また、看護系大学の学生が多く実習する急性期病院の病棟の実習環境も激変している。全体討議の場でも話題に出たように、我々は、まさに、「モデルなきケアの時代」に直面しているといえる。

そのような中、CQI モデル Ver. 1 とワークシートを活用したグループワークによって、参加者は、自己の立ち位置を多面的に見極め、それを他大学の教員に語ることで、自大学に対する見方が転換し、自大学の強みや価値に気づいていた。さらに、全体討議では、CQI の多様性を俯瞰でき、CQI 活動における大学教員同士の相互支援の場の必要性と意義を、改めて確認できた。

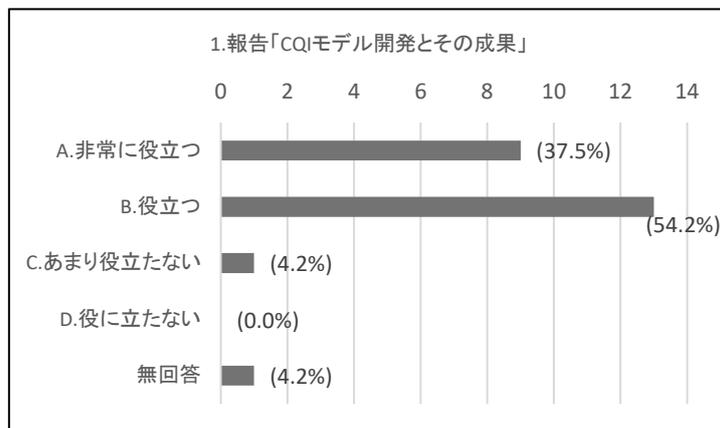
モデル図にも示したとおり、学生は、やがて「地域社会」で「人々の Life (生命・生活・人生)を支える自律的看護職」となり、「地域で暮らす人々」の健康を支援する役割を担う。看護系大学が 270 校を超える今、すべての看護系大学がそれぞれの置かれた場においてその力を発揮することにより、人々が健康に暮らす地域社会の実現に貢献できると思う。それを支えるのが、「大学間相互支援ネットワークの力」であることが改めて確認できた。そのような社会の実現のために、当センターでは、今後とも、看護系大学教員の相互支援の場づくりを推進していきたい。

14. ワークショップ評価

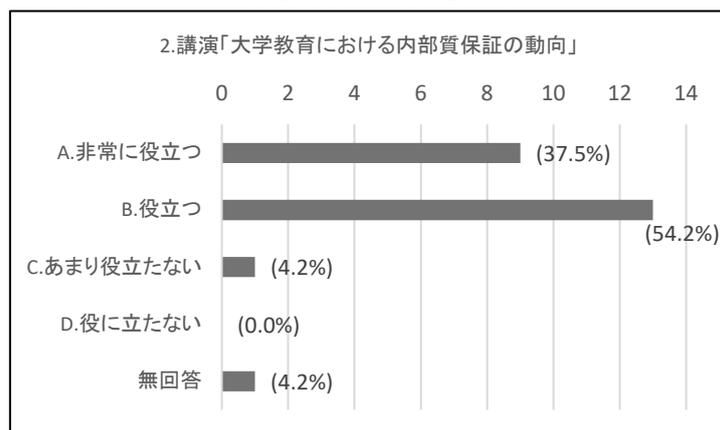
I. 講演と報告の部のみの参加者による評価

1. プログラムの評価

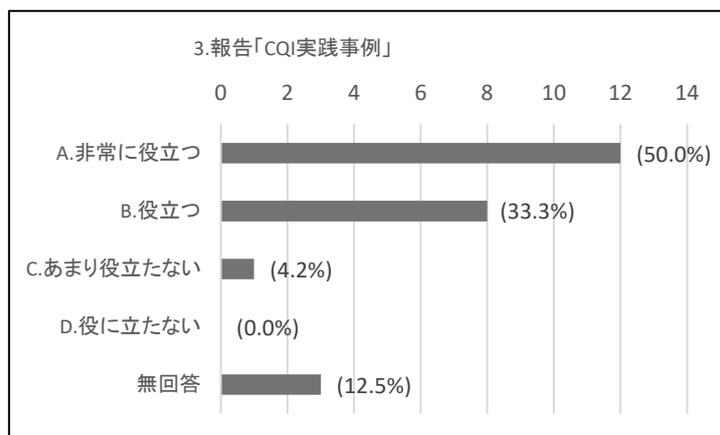
1) 報告「CQIモデル開発とその成果」は役に立ちましたか



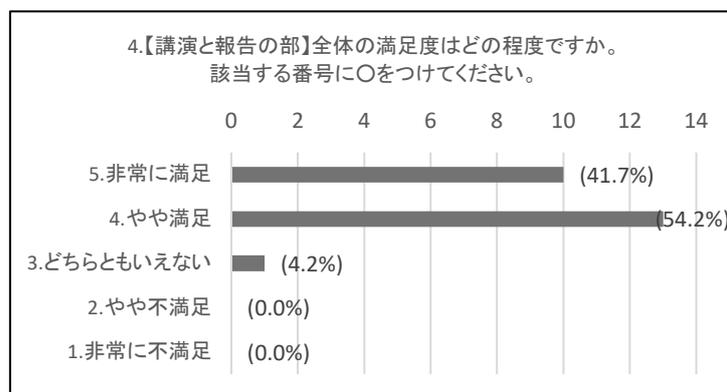
2) 講演「大学教育における内部質保証の動向」は役に立ちましたか



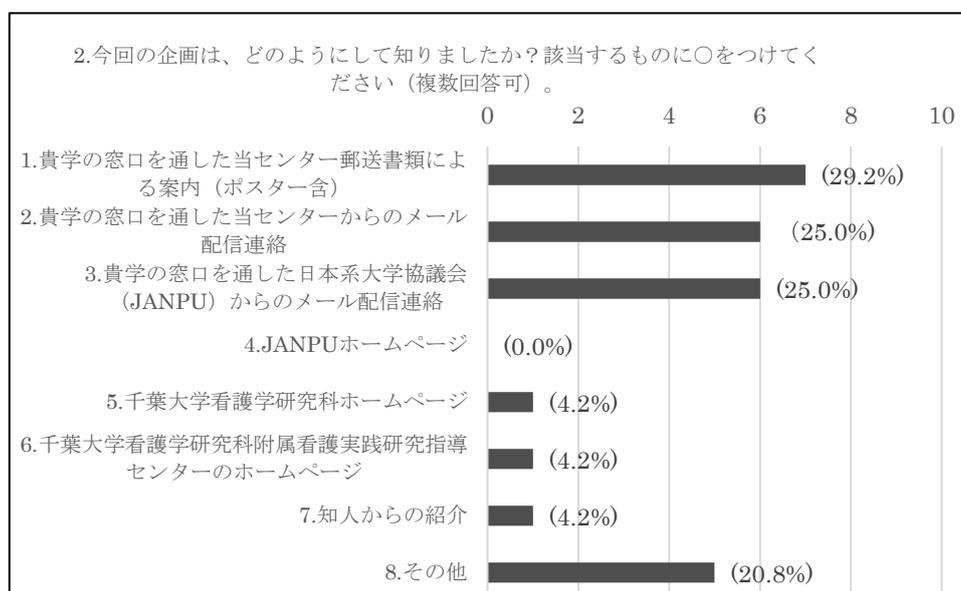
3) 報告「CQI実践事例」は役に立ちましたか



2. 全体の満足度はどの程度ですか



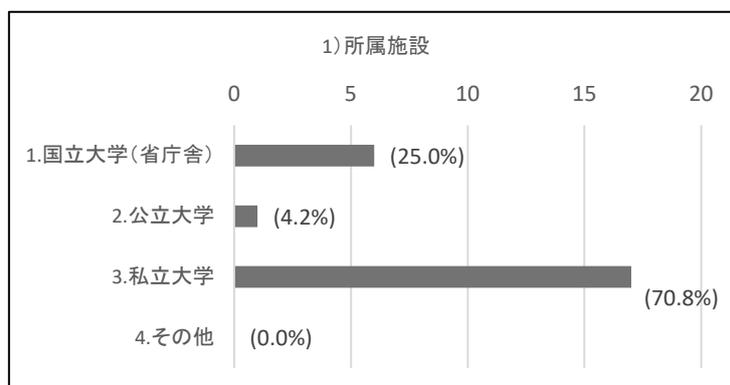
3. 今回の企画はどのようにして知りましたか



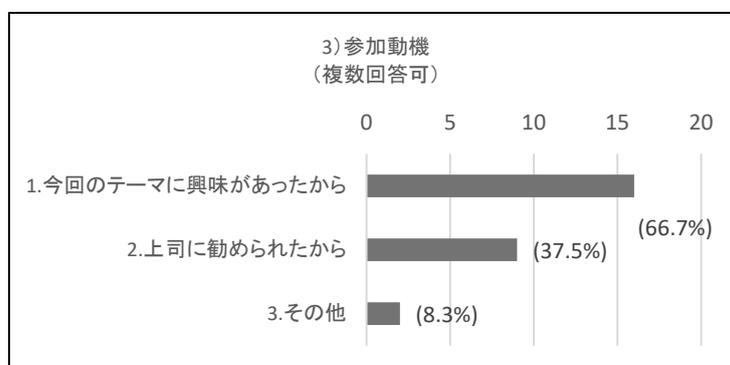
4. 看護系大学相互の支援ネットワークづくりに関し、看護学教育研究共同利用拠点としての当センターに、今後、期待することをご記入ください

- ・私は大学院生で、学生視点からの感想となってしまいますが・・・
最後の「CQI 実践事例の報告」の内容は特に興味深く、おもしろかったです。
大学生時代、「先生たちが使う言葉が微妙に違っていて混乱する」と私も思っていました。領域を超えて「価値のある変化をもたらす能力」で皆が話せるのはすてきだと思います。
- ・会場くらいです。
- ・看護学ワークショップを今後も開催して欲しい。学校1名の参加を2名にしてほしい。2名の場合、1名は講師 or 助教でも OK にしてほしい。本日はありがとうございました。

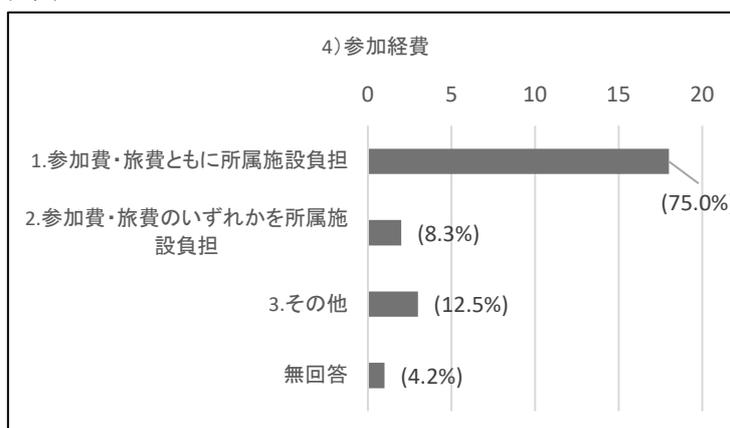
5. 参加者の属性



6. 参加動機



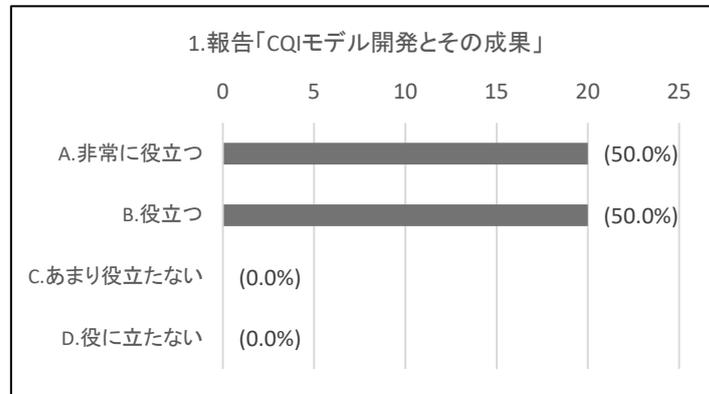
7. 参加の経費



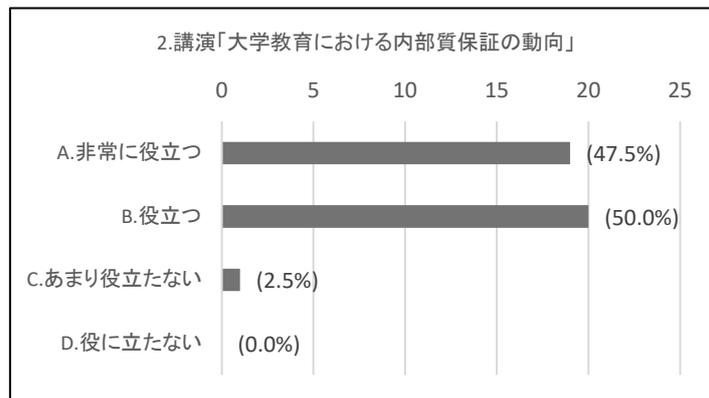
II.全日程参加者による評価

1.「講演と報告の部」の評価

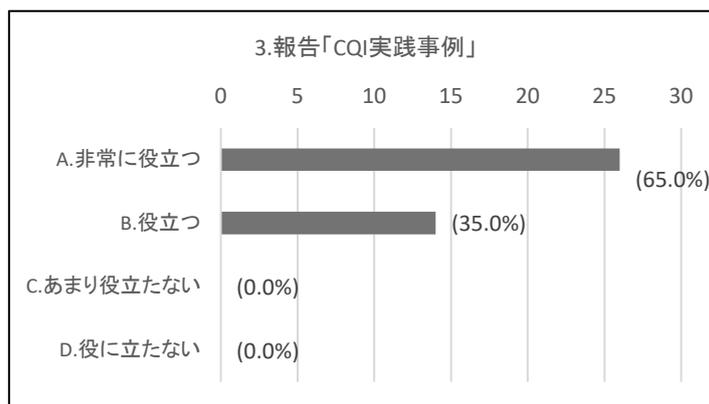
1) 報告「CQIモデル開発とその成果」は役に立ちましたか



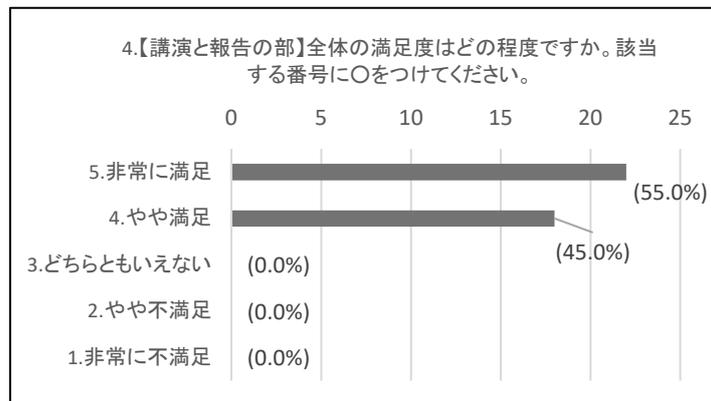
2) 講演「大学教育における内部質保証の動向」は役に立ちましたか



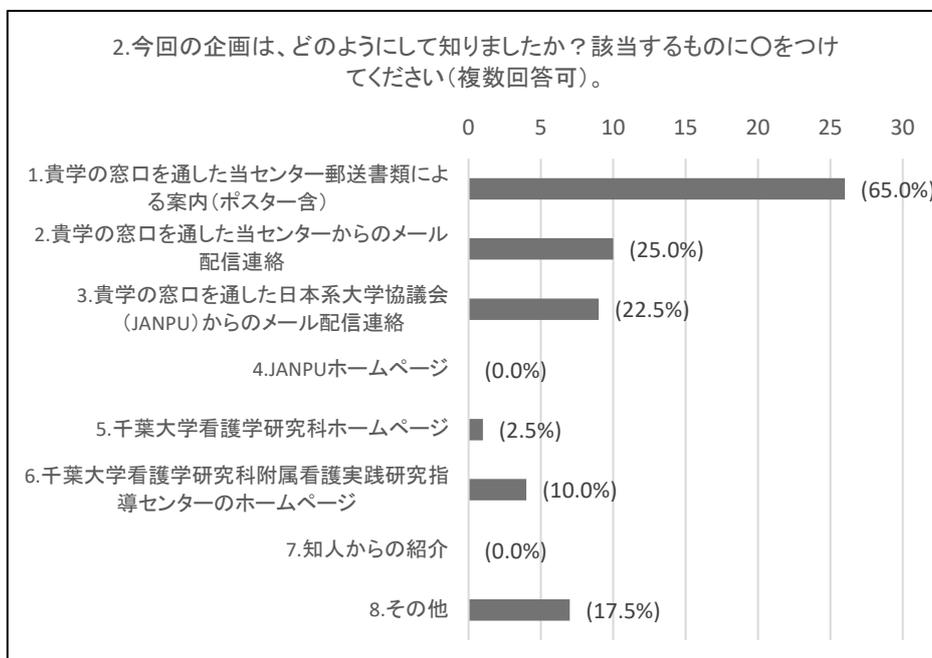
3) 報告「CQI実践事例」は役に立ちましたか



2. 全体の満足度はどの程度ですか



3. 今回の企画はどのようにして知りましたか



4. 【講演と報告の部】のプログラムに関し、お気づきの点がありましたら、ご記入下さい。

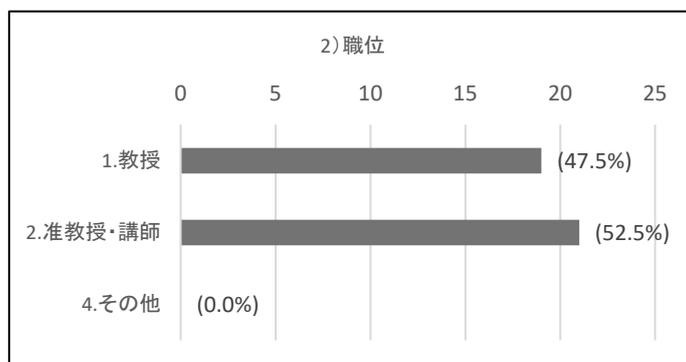
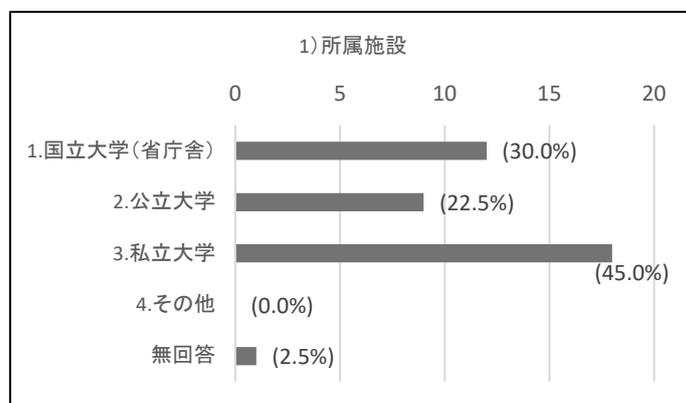
- ・ ハンドアウトの資料（出せる範囲で）があるとよかった。
- ・ 具体的な内容を報告いただき多くの気づきがありました。
- ・ 特にありません。
- ・ 私は、C Q I が何を意味するか知らない所からこのワークショップ参加に到ったため、初めに概要や具体例の説明があって助かった。
- ・ 教育の質向上のために基本的なことを学べる講演でした。報告はもう少し時間が長くてよいかと思いました。
- ・ 時間配分は適切であると思いました。開始の時間は早くなくて助かりました。
- ・ 内部質保証の基本的な考え方にたしかえることができ、確認できたことは大変有意義と思います。業務上どうしても目的や内容というよりも方法（しかもやりやすくというかや

ったこととして自分たちに都合がよい方法) に走りやすいので本質をおさえた上で考える機会があることが大切だと思いました。

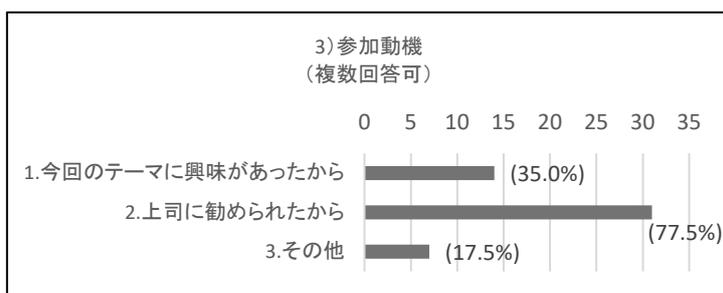
CQ Iモデルの実践モデル図はあった方がよいので資料に加えてほしいです。画面が小さくて文字の判別が難しいです。

- ・雨の日でしたので建物の移動が少し大変でした。
- ・大学教育における内部質保証の動向の内容がとてもわかりやすく参考になりました。
- ・(1日目) スクリーンに対して画面が小さくとても見づらい。手元の光りも影が2重3重になり全く書きづらくとても学習しづらい環境でした。改善していただきたい。
- ・ホームページ上の資料や報告書では見えてこない、背景やプロセスを聞かせていただき理解が深まりました。

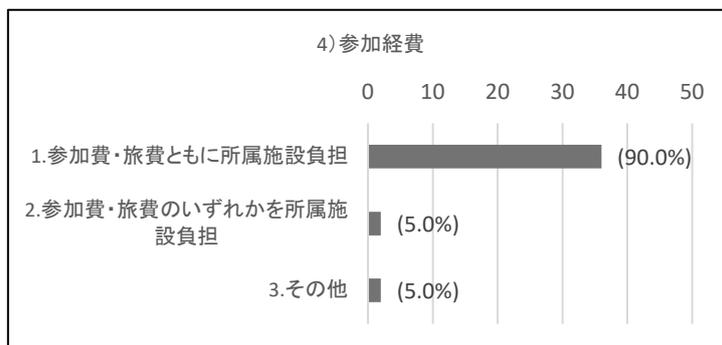
5. 参加者の属性



6. 参加動機

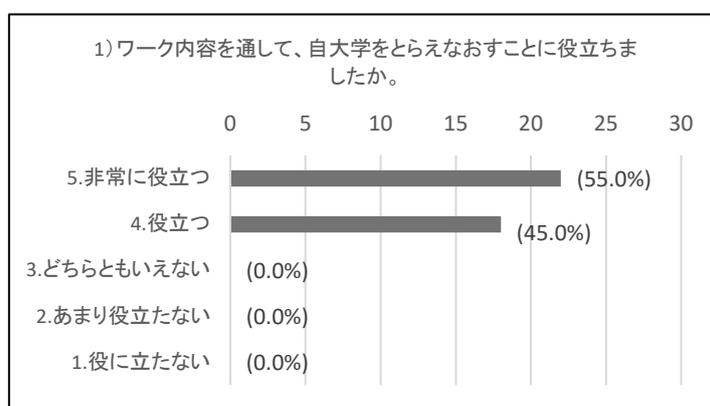


7. 参加の経費

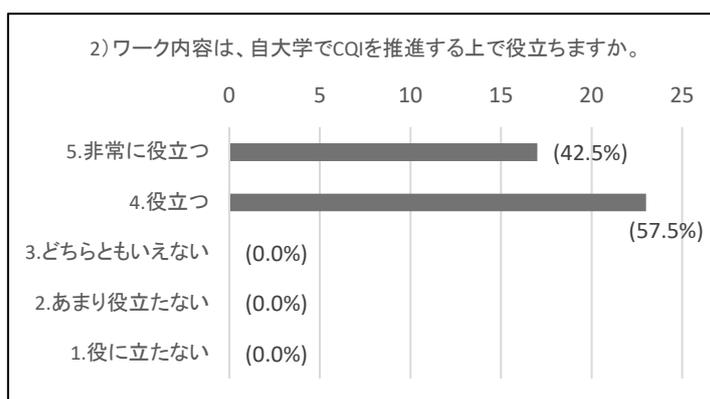


8. ワークについての評価

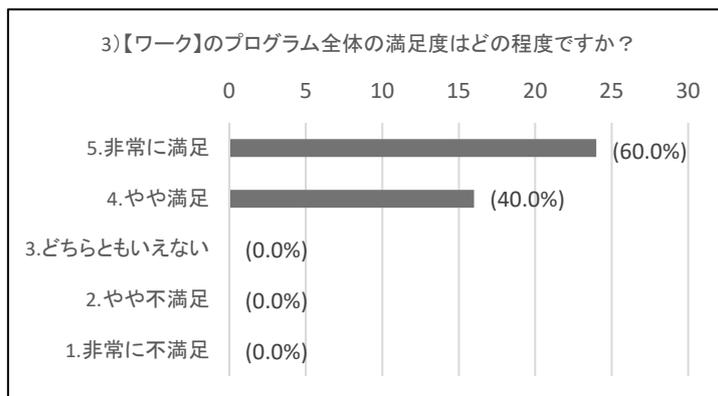
1) ワーク内容を通して自大学をとらえなおすことに役立ちましたか



2) ワーク内容は、自大学でCQIを推進する上で役立ちますか



3) 【ワーク】のプログラム全体の満足度はどの程度ですか



9. ワークショップ全体を通して、学んだこと、考えたこと、感じたことを自由に書いて下さい。

- ・色々な大学・領域・職位を超えて学べてありがたかった。
- ・ディプロマPを学生と共有できているか、から見直すことで様々な展開ができると思う。
- ・ファシリテーターを含め他大学の先生方と意見交換することで自分が抱えていた現状の課題が自分自身の思い込みや先入観に影響されていた点が多いことに気づくことができた。

- ・結論・結果を出さなくてもよいという気楽な中で言いたい事を話し、他大学の先生のお話を聞いたことがよかった。その中で当大学でできそうなヒントを得ることができた。

大学に戻って何ができるかまだわからないが領域を超えた教員間のつながりの形成、学生の1年生～卒業時までの継続した学生の自己評価のシステム作りに取り組みたいと感じた。CQIの概念をもっと深め、自大学にどのように当てはまるのか考えたい。

- ・他大学の現状と課題を共有でき、自施設の教育の改善につなげられると思った。
- ・自大学の強みがわかった。楽しく組織・改革に取り組みたい。
- ・CQIの考え方が実際に考えてみることで理解がすすんだ。

どうやって乗り越えていけばいいか、アイデアがでてこなかったところに自大学で身に付けて欲しい実践力とその評価についてヒントがいただけたので助かりました。

- ・同じような状況にある大学が多いこと。できるところから努力されていた報告を聞いていろいろなアイデアをいただいたので活用したいです。

- ・他大学の状況を知ることができ、自学の課題に対する方略の示唆を多く得た。何より自分自身の振り返りになった。ありがとうございました。

- ・「大学教育における内部質保証の動向」が非常に役立ちました。講演の中でも話されていたように、「教育改善や質保証のための取組が名目的なものにとどまり、教員組織や教員の意識・実践に実質的なインパクトをもたらしていない」と感じます。内部質保証の目的は、教育の充実と学生の学習成果の向上であること、どのような学生を育てたいかを教職員で共有し、深田先生の「最適化」で前に進めることが重要であると学びました。学内に持ち

帰って共有しCQ Iに取り組みたいと思います。

- ・問題の根本の1つは、コミュニケーション不足があることに気付いた。
- ・他大学の先生方とディスカッションすることで、改めて自分の考えを整理したり、問題意識を深めることができました。
- ・事前課題を行った時には、分析はしたもののスッキリとは整理されずモヤモヤしていたものが実践事例報告や他大学の状況をお聞きすることでこれから目指していきたいところや取り組むべきことが明確になりとても思考がクリアになった。早速、学部長に相談して取り組んでみたいと思えた。
- ・他大学の具体的な教育方法、苦慮されている点をきいて共通点、相違点を理解することが出来た。教員同士での語ることの楽しさを知れた。
- ・各グループワークのまとめ、発表がなかった分、十分な時間、討議ができて良かったです。

ファシリテーターの石橋先生のお陰で活発な意見交換ができ感謝しています。

ワークシートの事前課題（記入して持参する）はワークショップ参加する際の自己の問題意識を明確にするのに役立ちました。自大学を改めて地域の視点で捉え直す機会になりました。

- ・若手の教授や准教授にとっては、このような機会があることにとても意味があると考えられる。学科長等のそのトップ管理者にとってのアドミンストレーション全体のこういうものがあってもよいように思いますが、その組織にもよるので何ともいえないかな、と思います。

参加者のストラグルを言語化してストレングスをふまえていくと、元気になれるんだなあと感じました。

- ・自大学の現状が必ずしも特異ではないことを知り、少しずつのきっかけや工夫で変えられる可能性を感じました。学生の問題ばかりに目が向きがちでしたが、教員の意識改革の方がまず必要であると感じました。ゴールや正解を出さないワークという形も良かったと思います。

・自大学の現状理解から課題解決にむけてCQ Iを推進していく必要性を学んだ。特に、CQ Iモデルの図1により自大学を多面的な視点から情報を収集し、整理することで自大学の現状分析を図り、図2により現状分析から課題をもたらすプロセスを多面的に冷静に振り返ることができた。教育の質改善を実施していく上で、自大学をとりまく社会を含め学生、教員などの登場人物の位置関係と教育研究社会貢献の活動の展開や連携など多面的に俯瞰することがとても重要であることを実感した。

グループの演習、意見交換がとても有意義で楽しかったです。

- ・CQ Iについて 方法論に関心が向いていたが、どのように考えるか、そのために必要なことなどを考えることの重要性に気付いた。自大学の強みを再確認することができた。前向きになれた。

・大学によっていろいろな取り組みをしていて、とても刺激を受けました。忙しい毎日ですが、もう少し教育に関心を持たないといけないと思いました。

・参加前は自大学の弱点ばかりに目が向いていたが良い点、強みにも注目することができた。すぐに大きな改革は難しいが学生の力を信じて学生のためにできることから進めたい。

・現状の課題を新たな視点からとらえ直すことができ他大学の状況などがとても参考になりました。

・他大学の現状を知ることで、自施設の強みや弱いところに気づくことができた。教育上の問題として根拠をもって考えることができた。

・発表なし、提出なしというのは、各自の主体性にまかされていて各自の課題にそってすべてよい ・視点がわかる ・他大学の現状がわかる ・弱みが強みに思える ・自大学のことを客観的にみられる（ディスカッション、自己のふり返し）

・進め方をもう少し工夫できると良かったです。

・いろいろな大学の現状や話題から、自大学のふり返りができた。

もう少しワークショップが長いほうが、お互いの意見交換ができたと思うが、きっかけとしてはよかったと思う。

・グループのメンバーがやさしく聞いて下さり、話すことで整理できることもあった。コメントが具体的でためになった。

・自分の課題に気がつくことができました。他の教員への色々なアプローチの仕方について学ぶことができたと思います。

・自大学の位置づけを再確認できた。現在の立場でみえていなかったことが若手や中堅者からの視点でみえてきた。そのことで自分が何をすべきか明確になった。

・意外な強みもあるし、弱みもあると分かった。他学での実践が参考になることもあり、「それはできない」こともあるが、まず「知ること」が大切なのでよかった。

・無からの参加でしたがグループワークで他の先生方の取り組みやお考えを伺い教育や学生の成長に対する熱い思いと行動にとっても刺激を受けました。とても楽しくこの楽しさが成長につながることを実感しました。

・座談会は、共感、参考できる事が非常に多く有難かった。ワークメンバー、ファシリテーターに恵まれて、エネルギーを得ることができた。

・自大学の取り組みを考え、整理する機会となった。

・自大学の客観視できたこと、戦略を考えたこと。

・課題を感覚ではなく客観視することで方向性が明確になりました。

10. ワークショップ全体を通して、他の看護系大学との協働の機会がさらに欲しいと思ったこと、他の看護系大学と協働してさらにやってみたいと思ったことがあれば、ご記入ください。

・他大学で使用している評価用紙などの資料の紹介・提供

・カリキュラム評価について、興味があります。

・他大学との情報交換、めざす看護教育や組織のあり方について話し合う機会があるとよい。

・“教える”教育から“学ぶ”教育への転換を促進する教育上の工夫。

・FD研修に関する企画について情報共有したいと思います。

・2日間という時間で、昨年度よりグループ間ディスカッションの時間はへりましたが別の視点から座談会でもちよれて、それをシェアできたのはよかったですと思いますが、他の座談会とのシェアができなかったところもあり、ちょっともったいないかも。各座談会の内容を全体でも少しシェアできればよかったですかなと思いました。

・具体的なカリキュラムの内容や実施方法の工夫を共有することもできましたが、実際の運用についても協働できると良いと思いました。(カリキュラム開発など)

・LGBTや発達障害などの学生の指導や支援等について、大学の取り組みや現状における具体例や情報共有があれば今後の教育の参考になると思いました。

・大学横断型FD研修会

・まだ見えてこないです

・実践事例を知りたい

・根本では同じようなところが悩みの種であり、解決策を聞くことができたり、問題点として確定するまで話し合えたりして協働の大切さがわかり、先生からも協力しますと言ってもらえたので心強かった。

・まだここまで考えられません。

・協働となると大学同士の大きさを感じるのでやや難しいと思っています。まずは先生同士でつながることがまずははじめていきたいと思っています。

・若手教員の教育力のアップや夢を語れる場

若手は、上司の姿を見ていると思うので、動いている実際や前向きさが、伝わっていくようにしたいと思う。

・情報収集や共有の場があれば良いと感じた。

11. 次年度の看護学教育ワークショップ企画へのご要望やご意見をご記入ください。

・今回参加して勉強になったことが多かったので、こうした機会をもっと多くの教員が参加できるようにしていただきたい。助教・講師であっても教育経験が〇年以上というように設定して、こうした教員のニーズも反映した企画についてもご検討ください。

・講師・助教の教員がもっと参加してもよいと思います。

・若手教員のためのワークショップ

・新カリキュラムの構築に関する内容

・CQIのワークシートの使い方と発表のしかたについて“気になること”の表現が大きいのでどういう風にしぼるとよいかヒントがあると事前ワークが進めやすかったです。(ガイドも読んだのですがすみません)

・プログラム自体は充実していたがグループで討議する時間がもう少しゆっくと持てる

と良かった。交流会でもワークショップでも同じグループの先生と話すのが中心となり、なかなか、他大学の先生との交流を広げることが難しかった。何かもう一つ交流を広げる仕掛けがあると良いと思った。

- ・課題解決の実践例など報告いただければと思います。

- ・今回の企画は看護系大学で求められていることなのでぜひ何らかの形で継続していただきたい。

- ・グループわけにはいろいろな配慮があるでしょうが、座談会を選択できるのであればそのテーマに感心があるグループわけもいいのかなあと思いました。結局はそれぞれでおちつきどころにかわりはないと思いますが。

- ・実際にCQIに取り組まれている事例は大変参考になりました。教授レベルの人だけでなく、若い先生方が教育を語れるワークショップもあると良いと思います。

- ・教育学の専門家の先生の講演会。諸外国のCQIのような取り組みのお話が少しききたい。

- ・CQIの実践についての情報交換の場を提供して頂きたい。

- ・他大学との協働の事例

- ・テーマとワークシートの内容が、もう少しリンクしているとやりやすいかなと感じました。

- ・Gディスカッションでの近くで体験談がきけることはとてもためになったし質問されることへの答えからまた深まることもあったので継続してください。

- ・若手教員が参加できる企画を希望します。

- ・実現を意識した場合、一人の力では負担が大きく実現の可能性が低下するのではないかと思います。複数参加を可能に（2年に1回とか）していただけると大学での実現の可能性へのパワーが3倍以上になるのではないかと希望的に考えております。

- ・同様のワークショップは必要

- ・最後のまとめについて、結果のみの発表では一番聞かせていただきたいプロセスやメンバーの感動を共有することができないため、ファシリテーターの先生方からの推薦で、1～2グループに絞ってもよいのではないのでしょうか。

12. 看護系大学相互の支援ネットワークづくりに関し、看護学教育研究共同利用拠点としての当センターに、今後、期待することをご記入ください。

- ・若い教員（助教）への看護教育の質向上の内容のプログラム

- ・このワークショップは今回3回目の出席でした。毎回いろいろ学びがあり感謝しております。初回は講師として看護基礎教育のイロハを学びその後は教育委員会のメンバーとして組織的にどう教育の質を改善していくかを課題として参加していました。本日もこの後すぐに活用させていただきます。ありがとうございました。

- ・グループワークはとても良かったです。ファシリテーター、グループの先生方のお陰で沢山の意見交換をすることができました。グループワークを取り入れた方法を継続して頂

ければ幸いです。大変お世話になりました。ありがとうございました。

・このような研修企画をしていただき感謝です。ありがとうございました。次につづく教員をすすめていきたいです。

・これからも継続して交流の場を作って欲しいと思います。

・若手教員を対象としたワークショップの企画もお願いします。

・今回座談会にて昨年度語った参加者からグループファシリテーターに連絡をしてその後も相談にのってもらえたということは、ここならではだと思いました。そういう相談ができる場としては大切な存在と思います。

・毎年参加する時間も費用も難しいのでネットなどで取りくみ状況を配信して頂けると、今後も参考になるかと思います。

・自大学のCQIの取り組みの参考に他大学のCQIの具体例の共有や情報交換の場としてネットワークができると幸いです。(既に実施されているのであれば失礼致しました)

・このような機会をもう少し持てるとありがたいです。千葉は遠いので西日本でも一施設拠点になるところがあると良いと思いました。ありがとうございました。

・このような研修会の機会を今後も継続してつくっていただきたいです。

・全国の看護系大学が集まる場として、自由にディスカッションする場として継続して在りつづけていただきたいです。

・事例の提供(ホームページなど)があると参考にしやすいと思いました。

・モデル図を見やすくして配信して下さい。よろしくをお願いします。

・今後もこのように研修会の企画実施を継続していただくことがネットワークにつながっていくと考えます。本当にありがとうございました。

・これからも地域大学に開かれたセンターであってほしい。

・継続をお願いします。

15. おわりに

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 准教授
黒田 久美子

看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement：CQI）モデルの開発と活用推進のプロジェクトに2016年度から取り組み、2019年度は最終年度にあたる。ワークショップは、プロジェクトにおいては、モデル開発の成果を紹介する場、モデルやワークシートへの意見交換の場となってきた。昨年度のワークショップでは、開発したモデルとワークシートを使用して、グループワークでの他大学との比較、相互の学びの場となった。その結果、疲弊気味の参加者がエネルギーを得ていることが確認でき、2019年度は、さらに多様な立場のCQIの推進者から学び、必要な能力を把握するとともに、大学間の相互支援のネットワークを広げる場とすることをねらいとした。

昨年度と同様にモデル Ver.1 を使用したグループワークからは、モデルの有用性や必要性を再確認できたことに加え、今回、公開座談会の実施を加えたことで、新たな気づきもあった。

モデルやワークシートを使った相互支援として、昨年度に続き、2019年度のワークショップでもグループワークを行った。領域や職位に関係なく、利害関係のない看護系大学教員同士が相互支援することによって、自大学を俯瞰し、CQIに向かう思考の方向性を丁寧にたどることによって、CQIとしてやるべきことが見えてくる。一方、今年度はじめて企画した座談会は、CQIで取り組みたい事項に焦点をあてて、参加者同士が具体的な活動やアイデアの意見交換をするために実施した。

学生の学びの評価、ポリシーの共有、地域包括ケアシステムを背景とした実習の構築、若手・中堅教員からのアイデア発信などがテーマの座談会では、質疑応答や、実践のアイデア、活動報告が活発にあり、まさに大学間の相互支援のネットワークが目目の前に見えるようであった。また、質問を通して、共通理解しておくべき知識の周知もまだまだ必要だとあらためて実感した。

本プロジェクトでは、前提の一つとして、「絵に描いた餅ではなく、現実的で実行可能なCQI活動を導きだすことのできるモデルにする」を挙げているが、今回の公開座談会からは、絵に描いた相互支援のネットワークではない、活用性の高いネットワーク体制が必要だと考えられた。情報を求める発信に対して、可能な人がタイムリーに情報を返すことができるスピードと利便性が必要であること、一方で、看護系大学で共通理解しておくべき知識にアクセスできるための支援の必要性にもあらためて気づいた。

ワークショップを通して、看護系大学の教員の多忙さと、その中で、真摯に教育の改善に取り組もうとする姿勢に敬意を抱くとともに、看護系大学の相互支援の重要性をあらためて認識し、残り期間でプロジェクトをすすめていきたい。

16. 実施体制

【講演と報告の部】

《講演者》

工藤 潤 公益財団法人大学基準協会 事務局長

《報告者》

和住 淑子 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 教授・センター長
深田 美香 鳥取大学医学部保健学科 教授

【グループワーク】

《ファシリテータ》

1G:	野地 有子	千葉大学大学院看護学研究科	教授
2G:	吉本 照子	千葉大学大学院看護学研究科	教授
3G:	錢 淑君	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
4G:	黒田 久美子	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
5G:	斉藤 しのぶ	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
6G:	土肥 美子	大阪医科大学看護学部	准教授
7G:	飯野 理恵	千葉大学大学院看護学研究科	講師
8G:	石橋 みゆき	千葉大学大学院看護学研究科	准教授

【公開座談会】

《話題提供者》

Aグループ	山田 香	山形県立保健医療大学看護学科	講師
Bグループ	土肥 美子	大阪医科大学看護学部	准教授
Cグループ	深田 美香	鳥取大学医学部保健学科	教授
Dグループ	窪田 恵子	福岡看護大学	学長・教授

《千葉大学運営組織》

大学院看護学研究科長 中村 伸枝 教授

センター教員会議および実行委員会

◎	和住 淑子	教授
○	野地 有子	教授
	吉本 照子	教授
	手島 恵	教授
	黒田 久美子	准教授
	錢 淑君	准教授
	斉藤 しのぶ	准教授
	湯本 晶代	助教
	仲井 あや	助教
	大原 裕子	特任准教授

(◎ センター長・企画責任者 ○ 実行委員長)

令和元年度看護学教育ワークショップ 報告書

発行 2020年 2月

編集 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
野地 有子、和住 淑子、黒田 久美子、銭 淑君、大原 裕子

発行所 〒260-8672 千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学大学院看護学研究科

